
詩なき言葉は届かない

天川充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩なき言葉は届かない

【Nコード】

N2964I

【作者名】

天川充

【あらすじ】

周りの目を気にし常に自分の損得勘定で動いてきた主人公。そんな彼がネット上でユクエという人物を作り出しコエという人物と出会う。ネットで出会った相手に心をさらけ出すというのには抵抗があった。けれどありのままにさらけ出す彼女に惹かれ、ユクエは初めて本気の恋をする。君の歌声は柔らかく優しい天使のような声で僕はたまらなくそのコエが好きだった。君と初めて出会うのはライブ会場。そこで聞いた君の歌声は顔すらはつきりと見ていない僕にも響いて何か感じるものがあった。その後メールでやり取りをし

て君の声が忘れられなかった僕はカラオケに誘うことになる。そこから友達関係が始まって気付いたら僕は君の事を好きになっていた。人を好きになるって頭で考えるもんじゃない。理由なんてわからないものなんだよ。ユクエはそのことを彼女を通して知ることになる。君が元彼のことを忘れられなくて流した涙を見たときユクエはその涙を止めたいと思うようになる。僕にその代わり以上のものになれるなら君の傍にいたい。君と付き合いだした僕はそこから何か始まる気がした。君の喜ぶ顔が見たい。それだけで十分だった。本当に大切なことを教えてくれたのは君で、君もまた僕から何かを教わっていた。いいところも悪いところも認め合っのが本当の優しさなんだってこと、僕達はずっとわかっていたよ。君の待つ場所だったらどこにでもいける。そんな気がしたんだ。

詩と書いてコエ。

それが君の名前だった。お互いに本名も顔も知らないまま僕達二人は出逢うことになる。いや、僕達にとってはその場に起こされた活字だけが事実で、それ以外は架空の世界の物語なのだ。気持ちだけが僕達をつなぐ鎖だと考えてもいい。誰かと出会うときこんなにもドキドキしたのは初めてかもしれない。期待と不安の入り混じるこの世の中の縮図のような構造が心の中で展開されていたのだ。

文字だけの世界でイメージを膨らませ、実態を浮かび上がらせる。インターネットの世界ではそれが当たり前で、顔を合わせないからこそ匿名性というよさもあるのだ。世の人々はそこに危険性がないと信じていると言うが、そんなことはない。怖がっているは何も始まらないのだ。漫画が想像力の欠如を促し小説が想像力を促進するのなら、ウェブの世界はその中間に位置すると言っている。匿名性を保つことで全然別の人格を形成し、自分に自信を持つことができるのなら、それこそ最高の産物なのである。

ところが、近年はオフという形で実際にインターネット上で知り合ったもの同士が会うということも活発になってきた。音楽やスポーツ、何か共通の趣味の合う仲間同士が大勢集まってオフ会という形で大規模に行くケースもある。そこでは匿名性も失われ、コミュニケーション不足と指摘されている僕達の力量が試される。それは知り合いの誰もいない合コンにでも無理やり行かなくてはならない状況と似ていた。

僕と君はインターネット上の日記と言われるブログを通じて出逢った。いや、正確にはそれ以前に僕と君は出会っていたのだ。君が僕

のブログに記載されていたメールアドレスに最初にメールを送ってきたのは一ヶ月前の寒空が靉く師走になったばかりの頃だった。

「昨日、私の隣に座っていましたよね？」

軽い挨拶の次の文にはこう書かれていた。前日、僕は大好きなアーティストのライブに参加していた。場所はインボイス西武ドーム。1階1塁側3列目の通路側が僕の席だった。たしかに隣には若い女性が座っていたようだが、ライブに夢中で隣の人の顔を見る余裕なんてなかった。覚えていることはファンを巻き込んでの大合唱をする曲のとき、近くの女性から発せられる天使のような歌声だけだった。ブログには青のツバ入りキャップと紺のジャケットと黒いTシャツに黒いリュックサックをしょって参戦すると記載していたから、おそらくそれを見てピンときたのだろう。スポーツドリンクを一口飲むと、慣れた手つきでキーボードをカチカチと叩き僕は返信する。「昨日のライブに参戦していた人ですか？」

君はその言葉を待っていたかのようにすぐに返事をしてきた。あ那时的君は何を考えていたのだろう。お互いにZEROという5人組のロックバンドが好きなことで僕達は意気投合し、いつしかメールをしなくてはおかしくなるくらいに文字による言葉をぶつけ続けていた。ブログを通して初めてもらったメールが嬉しくてつい依存しすぎてしまったのだ。現実世界に生きる今田悟としてではなく、架空世界の僕自身が作り上げたユクエというキャラクターとして。

ZEROファンをこうしてインターネット上で公表している人は数多くいる中で、僕を見つけ君は選んだ。同じ女性ではなく、異性の男性である僕を。そのときの真意はわからなかったが、そのことがこの上なく嬉しかったのは事実だ。もっともこれから先これ以上の発展があるなんて夢にも思わなかったのだけだ。

それから一カ月後の今日、僕と君は初めてちゃんと意識した形で会うことになっていった。君からの誘い。それは僕が微かに覚えていた君の歌声を覚えていたことから始まった。ライブに集中していても周りが見えない状況でも耳に残っていた心地の良い天使のような歌声。寒い体を温めてくれたあの声はプロであるバンドを目の前にしても色褪せることはなかった。あの声忘れられなかった僕は思い切って君に聞いたんだ。「君の、コエの歌声をもう一度聞きたい」と。僕の指は何かに取り憑かれたように音を立てて稼働していた。

「じゃあ一緒にカラオケに行こうよ」

君の答えは意外にもあっさりとしたものだった。誰ともわからない顔の見えない相手に対しても君は本当の友達を誘うようにタメ口で返事をする。僕には正直言ってネット上で知り合った人と実際に会うということには抵抗があった。それは誰にでもあるであろう感情。リアルの世界とバーチャルの世界には何らかの壁がある。それを自ら壊すことは容易ではないのだ。

多くの人がそうだとは思いますが、リアルの世界に住む僕とバーチャルの世界に住む僕とでは別人なのである。ネットの中、ブログ上では僕はユクエなのだ。自分で作り上げたブログの管理人としてのユクエという人物はつながりを大事にし、自分が好きなアーティストについて詳しく知っている情報の伝達者という人格を担っていた。楽曲のレビューに新曲情報、ライブレポ……。時にはZEROに関する質問を作って一問一答の形で回答していくバトン形式の企画を考案したりもした。毎日のように複数の記事をアップしてコメントを付けに行くことで、人気ブログという地位を獲得していったのだ。ところが、現実世界に生きる今田悟はいつも孤独だった。正確に言

えば上つ面だけの関係しか築けなかったのだ。大学内ではいつも周りの言動に合わせ、常に損得勘定をし頭で計算して言動を起こすのが僕だったのである。誰かがけんかをすれば合理に適っているほうの味方をし、自分と気が合わない人の前でも心の中ではバカにしつつもいい人のフリをする。僕はいつも誰かの上に立っており、その優越感で客観的に第三者的な付き合いをしてきたのだ。誰かを信じなければならぬと思いつつも、信じられるのは自分だけ。いつもそう思ってきた。そういう意味で僕は孤独だった。誰にも頼らないで生きていくことなんてできないことはわかつているつもりで、わかつていなかっただのだ。本当に愚か者なのは自分かもしれない。ただそれを認めるのが怖かった。

こんな僕は今まで一人として心から誰かを愛したことはない。もちろん女友達や恋人はいたが、それは僕にとって異性として意識するほどのことではなかつたのだ。女友達や恋人がいる・いないでは周りから見られる評価が変わってくる。女友達や恋人が少しいるだけでもいやつからは尊敬のまなざしで見られ、勝ち組になったような気分で見られるのだ。僕にはそれがとても心地よく気持ちのいいものだった。利用していると言えば言葉は悪いが、僕は確かに女友達や恋人を自分の周りを固めるファクションのように着込んできたのだ。

そんな僕が顔も知らない女性と遊びに行く。考えも及ばないことだった。キーボードを叩く手が一瞬止まる。脳内ではユクエと悟の間を行ったり来たりしている。ユクエという人物は完璧に演じられなければならぬ。それこそが天才であり完璧主義者である悟の使命なのだ。僕は気持ちを奮い起こし、再びホームポジションに手を合わせる。

「いつ行きましようか？」

「そうだな……、月末の二十六日なんてどうです？」

「わかりました、二十六日の日曜日ですね。予定を空けておきます」
顔の見えないもの同士なのにそのときの表情が手に取るようにわか

る気がした。うきうきとドキドキの入り混じった、はにかむような笑顔で会話をする二人。僕と君はどんなに離れていても気持ちに通じ合っていたんだね。もちろんこのときは悟と君ではなく、ユクエとコエの作り出された心に過ぎなかったのだけだ。

三時十五分。僕は約束の時間の十五分前に渋谷の八千公前にある交番にやってきた。白黒ボーダーのTシャツにグリーンのセーター、紺のジーパンと茶色いニット帽。履き慣れない黒いブーツが今にも靴擦れを起こしそうだ。どれも今日この日のために新調したファッションだった。

日曜の昼間、それも若者の街だけあってカップルの待ち合わせも多い。片耳にヘッドホンを押し当て口にピアスをした男がガムを噛みながら遅いじゃないかとけんか口調でケータイ電話片手に怒鳴り声を上げる。そこに慌てて登場した女は間に合わなかったのである。化粧をしながら悪びれた感じでごめんと謝っていた。明らかに作ったぶりつこと化粧の厚さが僕の気持ちを焦らせるひとつの原因となっていた。

完璧に物事を遂行するために約束の時間よりも早く到着しなくては気が済まないタチだ。待っている間に頭の中で何度も何度もシミユレーションを繰り返す。その中で最良のパターンを何通りか用意しておくことで不測の事態にも対応ができる。僕は今までそうやってどんな困難も切り抜けてきた。ただ今回は僕であり僕ではない。もうひとつの人格、ユクエとして行わなければならないのだ。いつも以上に慎重になる必要があった。

待ち合わせの時間まであと五分と迫って辺りを見渡すと、ふと一人の女性に目が留まった。白と黒の縞模様が特徴のベレー帽にそれに合わせたかのような白のコートと黒のマフラー、そして茶色のブーツを履いてグレーのハンドバッグを両手で中央に添えた黒髪の二代と思われる女性。身長は一六 台後半くらいだろうか。女性はバッグからケータイを取り出すと、メールを打ち始めた。それとこ

とを同じくして僕のケータイの着信音が鳴り響く。ZEROのインザフューチャーという曲だ。

『今着いたんだけど、どこにいますか？』

コエからのメールだ。僕はその短い一文を2、3回読み返すとかじかんだ手をこすり合わせながらメールを打つ。

『私もすでに交番前にいます。今日の服装は……』

そう言っただけで今日着てきた服装の特徴を記して送信を押す。僕にはできるだけ動揺を隠すよう努める必要があった。今日が初対面とはいえ関係はただのメル友に過ぎない。僕は人見知りだとか上がり症だとかと人に見られることが嫌いだ。どんな人と会うときにも平常心でいられることこそが僕の個性として存在していたのだ。そのほうが周りの受けもいいし、うまく渡り歩いていける。そういう自信があったからこそ僕はその人格を演じてきたのである。

メールを送信したとほぼ同じ頃、先ほどの女性がきよるきよると辺りを見回していた。ケータイの画面とにらめっこしながら、周りの人の服装をチェックしているようだった。そんな彼女をちらりと見た瞬間、僕と一瞬目が合う。僕はその瞬間目をそらしたが、一歩ずつ足音がこちらに近づいてくるのがわかった。じろじろ見ていたことに文句を言われるんじゃないかと覚悟し、恐る恐る低い姿勢で彼女の顔の方向に向き直した。すると、先に言葉を発したのは彼女のほうだった。

「初めまして。ユクエさんですよね？」

明るい笑顔で僕のハンドルネームを呼ぶ彼女にどう反応しているのかわからなかった。思わず「えっ？」と声を上げてしまった僕はこのとき初めてその彼女が君だということに気付いたのだ。さっきまでの平常心はすっかり失っていたけれど。

「……君がコエさん？」

「はい。想像していたのと違うから驚いちゃったかな？よく言われるんです、メールと直接話すのでギャップが大きいって」

君は照れを隠しながらはにかんだ表情で言う。やはりこのときも

君の声は魅力的だった。透き通った聞き心地のいい声。癒し系とでも言うのだろうか。遠目ではわからなかったが、すらっとしてお姉さん然とした美人だった。顔は矢田亜希子似といったところか。一見お嬢様風でおとなしそうな印象なのに、元気いっぱいいでくだけた今時の若い女性的なところを持つギャップが魅力的だった。やはりリアルの世界で会ってみなければどんな人なのかということとはわからない。

簡単な自己紹介を済ませた僕達はカラオケ店目指してセンター街を歩いている。今までメールを通して話をしてきた相手が自分の隣を歩いている。不思議な感覚だった。大袈裟かもしれないが、僕にとっては今までラジオを通して話してきた芸能人が隣を歩いていると同じくらい大きな出来事だったのだ。君と出会っただけで完璧に作り上げてきたユクエという人物像が僕の中で崩壊しようとしている。今までリアルの中で培ってきたことが通用しないのだ。

僕達を見ている周囲の人々は僕と君を恋人同士だと思っただろう。けれど僕達には恋愛感情というものがなかった。ただのメル友という関係。友達だからといって男女2人きりで一緒にいるのは変だと言う人もいるけれど、僕はそんなことはない。今このときに思った。男女の友情は成立する。ネット全盛期にあつて男女の垣根を越えた出会いが増えた現代ならなおさらだ。

世の中間関係が希薄になってきたと言うが、それはインターネットの普及のせいではけしてない。インターネットが人間関係をつなぐことだつてあるのだ。何にだつて弊害はある。危険性ばかりに目を向けていたら大事なことに気付かないのではないか。僕は何でも他人のせい、社会のせい、世の中のせいにする今の世間の風潮が嫌いだった。

「ねえ、ねえつてば」

僕が考え事をして一人の世界に入っていることに気付いたのか、君は声を荒らげて言葉を投げる。下から顔を覗き込む君の視線が痛か

った。ごめんと謝りながら君の顔を見ることで我に返ると、僕達は足を止めた。派手なネオンや装飾が施されているパチンコ店を構えるビルの3階がカラオケ店の受付だった。周りにはデパートやファーストフード店が立ち並んでいて、昼間という時間帯からか学校帰りの高校生の声で賑わっている。僕達は茶髪でセーラー服を着た女子高生2人組の後に続いてビルの右脇のエレベーターに向かった。

「今日はとことん楽しもうね」

君はこの日を待っていたかと言うように純粋な笑みを浮かべて僕が相槌を打つのを面白そうに見ていた。君が僕の顔を下から覗き込むように見ていると、エレベーターの扉が開いた。前を歩いていた女子高生2人組のほか、色黒の男女カップルと大学生のカップルが降りるのに続いて僕達も出る。

有料アーケードゲームがいくつか並ぶ周りを囲むソファアが置かれた待合室に3桁の部屋番号が張られたいくつもの扉。エレベーターから数十メートル先の正面に、脇に階段とトイレが添えられた受付があった。どこにでもある普通のカラオケボックスのようだ。ドリンクバーを汲みに来る高校生の姿も見える。変わっているところと言えば受付の女性店員がみんな黒地に白を基調としたエプロンをするメイド服姿ということくらいだった。

僕達は一緒にエレベーターに乗っていた高校生達の後に続いて受付に並んだ。次々と前の人から順番に名前、時間、コースを書き込んでいく。書き終わり準備ができた人から順番にメイド服を着た女性店員に連れられて自分の部屋へと案内されていくのが見えた。その姿を目で追っていると耳元で僕の名前を呼ぶ声があった。君が耳打ちを立ててきたのだ。下から顔を覗き込むように僕の顔を見つめる。それにびっくりして僕は思わず動揺して一歩君の傍から離れる。

「すみません、どうしたんですか？」

「コースはフリータイムのドリンクバーでいいのかなって思って。」

いちいち後で追加するの面倒だし、いつも私はそうしてるから」

何だそんなことかとほっとしてお任せしますと君に伝えた。君は

わかったと言つて空いた一步前に出た。僕らの番が回つてくると君はすかさず受付のテーブルに身を乗り出し、記帳する。腰の辺りまである綺麗な黒髪から覗き見える健康そうな腰に僕は目を合わせる事ができず、なんだか恥ずかしくてそのときだけ他人の振りをして見せたのだつた。君は記帳を終えるとそんな僕の手を引っ張つて終わったよと声をかける。君の手はとても柔らかく温かかつた。

「508だつてさ。先にドリンクついで行くかうか」

手を握られて動揺を隠せない僕は声にならない返事と頷きをする。君に渡されたグラスを片手にドリンクバーの機械の前に立つ。君はメロンソーダの上になつぷりとバナライスを盛り、フロートを作つていた。そのときの嬉しそうな表情はどこか幼い少女のように見えた。君に遅れを取らないようにと慌ててこぼしそうになりながらレモンティーをグラスに入れた僕は、再びユクエの人格を呼び覚まし君の前で先導する。沈黙のまま僕は黙々と階段を駆け上つていった。時折ペースが速すぎるのか後れを取つてしまふ君に振り返り足を止めながら。女性に気配りなどしたことのない僕にはどんなペースで進めばいいかわからなかつたのだ。もっとも典型的な文科系で運動嫌いな僕は息切れをしていただけだ。

はあはあと二人とも息切れした先によく僕達は部屋を見つけた。登つてみてエレベーターで来ればよかつたと後悔したが、動揺していてそこまで機転が回らなかつたのだ。おそらく君は気付いていたのだらうが、僕があまりに速いペースでどんどん行つてしまうものだから言うタイミングを逃したのだらう。息を切らして膝を抱えながら笑顔で速いねと君が言うのを聞いて僕の胸にちくつと刺さるものを感じた。

ドアを開けて部屋を見渡すと、ガラス張りの窓から外の景色が無限に広がつていた。白い丸テーブルを囲むように置かれたソファ。ワイドの液晶を搭載したテレビモニター。白熱灯の光が雰囲気を醸し出す。僕と君は帽子と上着を脱ぎ、荷物を自分の脇に置いて対角線上に座つた。コートの下から現れた青地でタートルネックのセー

ターに、白いスカートから覗く透き通ったように白く健康そうな細長い足。君は僕に2つあるうちの1つのマイクを渡すと、何から歌うのと尋ねてきた。僕が先に歌っていいよとぶっきらぼうな口調で言うと、君はナビを使って素早く操作し1曲目を画面に転送した。

「それじゃあ1曲目、歌いま〜す。曲はZEROで『摩天楼』」
マイク片手に選手宣誓でもするかのように左手を突き上げ立ち上がった君は、ソファーに腰をかけ見上げている僕に向かって視線を送った。瞬く間に機械から爽快なメロディーが流れ始める。この曲は僕達が出会ったライブで最初に演奏されたナンバーだった。まさに今日この日の始まりにぴったりの曲だ。

僕は君の歌声を生で聞いてようやくあの時間こえた天使のような歌声の人物と君を重ねて見ることができた。君の、心の琴線に触れるような優しい甘い美声に僕は癒され、酔いしれていた。このときが永遠に止まっていて欲しいと願うくらいに。君が歌うたったの5分間が何十分にも何時間にも感じられた。僕の心は完全にこのとき君の歌声に飲み込まれていたのだ。

君は歌い終わると、呆然として拍手もできないまま固まっている僕の顔を腰を曲げて下から覗き込んだ。僕は慌てふためき、ソファーからずれ落ちる。

「次はユクエの番だよ。早く入れて」

「ごめん。今入れます」

僕は恥ずかしそうに髪をかきながら急いでナビを操作し、曲を選択した。一瞬の間の後イントロが流れ始める。僕が1曲目として選んだのはZEROの『輝ける星』というバラードナンバーだった。

君は部屋に置いてあるタンバリンを手に掲げ場を盛り上げる。僕は君に会う前から今までの緊張が一気に解けていくのを実感した。メロンソーダの上に乗るアイスを口の周りに付けながら笑う君の顔がどこかおかしくて歌うことに集中できずに吹き出してしまった。こうでなければならぬという僕が築いてきた人物像は間違っていたのかも知れない。そう思わせるにふさわしい空間だった。僕が口の

周りのことを指摘すると君は恥ずかしそうに持参していたポケットティッシュで拭き取る。

君は曲が終わるとティッシュを丸めてテーブルに置き、一口メロンソーダを飲む。

「やっとユクエ君らしくなってきたね」

「……僕らしく？」

僕は君の言葉に引つ掛かりを覚え心なしか顔を近づけて聞き返す。君はソファに座り込み、下から僕の顔を覗き込むように顔を近づけて言う。

「そう。今日私と会ってからずっと何か考えながら話してるんだもん。自分を守るために壁を作ってるみたいな感じでさ」

僕は言い返すことができなかった。ユクエというバーチャルなキャラクターを演じることでイメージを壊さないようにと努めてきた。

いや、僕という人物自体が周りの目を気にし、誰にでも好かれる人物を演じてきたのだ。僕は自分に厳しくすることで自分を守ってきた。それが正しいと絶対とさえ思ってきた。だけど君の前でだけはなぜかそれがいけないように思えてくるのだ。

君はそんな僕の気持ちを出会って僅か数時間で見破ってしまった。誰にも見破ることができなかった完璧な演技を。いや見破っている人もいたのかもしれないが、言えないのだ。それを直接面と向かって言ってしまう君になぜか僕は魅かれていた。インターネットという架空でありながらも現実に生きるつながりでありながら、真に現実で生きる友よりも少なくとも今このときだけは心が通じ合っていたのだ。

「ユクエ君はユクエ君でいいんだよ。何も気にする必要はない。周りにどう思われようと関係ないと思うんだ。少なくとも私の前ではありのままのユクエ君でいてほしいな」

「うん、わかり……わかったよ」

僕はいつもの調子で敬語になりそうなのを言い直し、きよんとした表情で返事をした。正直君の押しの強さに圧倒されて飲まれてし

まっていた。君の顔が近かったことで動揺していたというのもあるのかもしれない。だけどここに来て女性から説教をされるとは思っても見ないことだった。君は体勢を立て直しソファーに寄りかかる。「ごめんなさい、なんか説教くさかったですよ。気にしないでください。さあ、気を取り直して次の曲入れるね」

君は慌ててナビを手に取り曲を選んだのか、今話題の人気女性ソングライターの新曲をセレクトしてしまった。君はかわいらしい女性の曲って苦手なんだよなと言いながら、僕の好きな魅力的な歌声で癒してくれた。恥ずかしがりながら頬を赤らめて歌う君の笑顔がとてもかわいくて、僕は思わず写メを撮ってしまう。君は歌うことに夢中で気付いていなかったけれど、写メには君の笑った唇から綺麗な白い歯がくつきり映っていたのだ。

「あ、もうこんな時間だね」

君はケータイの画面で時間を確認すると示していたのは午後七時半。テーブルには飲みかけのメロンソーダとレモンティー、アイスクリームがグラスに残っている。僕も君も約4時間歌いっぱなしで喉に違和感を覚え始めた頃だった。君は残っていたメロンソーダを豪快に一気に飲み干して言う。

「最後にZ E R Oの曲一緒に歌おうよ。何がいいかな？」

「そうだな……、『また会おうね』なんてどう？」

「いいね。ライブでもラストに歌ってくれて大合唱で盛り上がったもんね」

Z E R Oの『また会おうね』には特別な意味があった。交通事故で親友を失ってしまったボーカルが悲しみのあまり作った曲。最後に親友と会ったとき「また会おうね」と言えなかったこと。もしその一言が言えていれば親友は死なずに自分のもとへ帰ってきて、あの笑顔をもう一度見せてくれたのではないか。もつともつと話したいことがたくさんあったのに自分に内緒で先に逝ってしまうなんて、なんて神様は残酷なんだ。自分がどうしても許せなかった。そんな気持ちを入れてせめてこの歌を聴いて歌っている瞬間だけでも天国

から蘇って歌っている姿を聞いて欲しい。明るいポップな曲調の中にもそんな悲しい思いが詰まっている。

おそらくこのボーカルにしてみれば「また会おうね」という言葉は他の誰よりも重い言葉で大切にしていきたい言葉なのだろう。だからこそファンもその気持ちに応えるかのように大サビで一緒になって大合唱をしているのだ。笑顔で歌わなければその親友は現れないかもしれない。ライブ会場で見ると最後のファンの顔はとても穏やかで僕が一番好きな空間だった。CDで聴くよりもDVDで観るよりも何よりライブでみんな一体になって一緒になって歌うことが大好き。僕のカラオケでのラストの曲はいつも決まってこの曲だった。君の甘くて優しく美しい声に僕のかすれた低く力強い声が重なる。画面に映し出されるライブ映像を見ながら二人の声が響くその空間はさながらプチ・ライブといった雰囲気だった。映し出されるZEROのメンバーの映像にきゃーとかおーとか歓声を上げながらボルテージは最高潮に達していく。二人ともソファーから立ち上がりマイクを持たない左手はライブのときのように腕の上に突き上げていた。時折お互いの顔を見ては笑顔で白い歯をこぼす。このときだけはなぜかもう何年もずっと一緒にいる親友のように心が通い合っていたのだ。

「へえ、それでその後どこまでいったんや」

「別に何も無いよ。あっさりバイバイしてまたねさ」

「それから連絡ないんやろ？心配にならへんのか。1ヶ月も音沙汰なしなんやし」

「そんなことないよ。メル友なんてそんなもんだろ」

大学内で唯一本音で話せる人物、それが沖本靖だった。彼は僕のブログのファンとして開設当初から訪れ、大学内で僕の行動を見ているうちに気付いたそうだ。そしてメールで誘導尋問をして確信し、僕に話しかけてきた。コテコテの関西人なのだが、無理に東京弁を習得しようとして失敗し、今では偽関西弁のようになるときどきイントネーションがおかしいことがあり、それがちょっと笑える。

彼には洞察力があり、本音をさらけ出してしまうような僕とは正反對の人物だった。だけどブログでの交流が長かったせいかわ僕は自然と気が合った。肩まである茶髪であごひげを生やした長身の男。ユニクロで買ったカジュアルなシャツとジーパンが妙に似合う気さくなやつだ。

ブログで交流があるから当然君のことも存在を知っている。だから僕は靖にだけは近況報告をするようにしていた。彼だけは裏切らない。そのことは僕も疑おうとはしなかった。春休み中の大学は静かだ。僕と靖はこうやって誰もいない構内を利用してこっそりと会って話をするのが好きだった。靖はあごを左手でなでると、ベンチから立ち上がる。

「ほなそろそろ行くわ。今度コエちゃんに会わせてな」

靖が左手を挙げて手を振った瞬間、ZEROのインザフューチャーが鳴り響いた。僕のケータイが鳴ったのだ。靖は立ち止まって再び

僕に近づきケータイの画面を覗き込む。ケータイには一通のメールが入っていた。メールを開くとそれは君からのものだった。件名にはお久しぶりですという言葉が添えられていた。靖は僕からケータイを奪い取り、メールを音読する。

「ん、なにになに……」週末に一緒に遊びに行きませんか？友達も一緒なんだけど、ユクエ君の友達も一緒にどうかかな？」だってさ。1ヶ月振りなのに遊びの誘いなんて積極的やな。もち、行くんやろ？俺も行つていいんよな？」

僕は靖の言葉にすぐには答えることができなかった。君に会いたくなかったわけじゃない。むしろ逆だ。僕は君に特別な感情を抱きたくなかった。実際に会ってみて君が思っていたとおりのすばらしい人だということはわかった。ただあくまでネット上で出会ったバーチャルの付き合い。もしかしたら君も僕と同じように別の人格を演じているのかもしれない。

ありのままでもいい。その言葉は紛れもなく真実の君の台詞だった。だけどそれは僕を偽りの人格から解き放ってくれただけであって、君の殻を破っていないのかもしれない。僕はこのままコエという人格に惹かれていくことが怖かったのだ。完璧主義者である僕にはどうしても素性のわからないことを避けようとする保守的な心が邪魔をするらしい。

そんな沈黙を続ける僕の心理を読んでか、靖は僕のケータイを取り上げた。

「何をそんなに悩む必要があるんや。こんなもんはこうやってこうして……こうや」

靖は高速で僕がケータイを奪い返そうとする手を振り切り、メールの文章を打つと送信ボタンを押した。メールの文章には『お誘いありがとうございます。私も友達誘って行きますね』と書かれていた。僕が靖からケータイを取り返して撤回しようとして慌てっていると、再びメールが入った。君からの返信だった。そこには『楽しみにしてるね。日時は……』と連絡事項が書いてあった。

「これで行くしかなかったわけやな。ま、俺もいるんやし、なんとかなるで」

そう言つて靖が僕の背中を叩くとなんだか勇気と不安を同時に押された気がした。前はユクエという人物で行くことができたが、今回は悟として行かなければならない。君には僕自身を見せたけど、君の友達はどう思うだろうか。人一倍周りの目を気にする僕にはそれが不安でたまらなかつた。

約束の朝。桜が見ごろを迎えた週末の上野駅周辺には行き交う人々の群れがどこいくとなく続いていく。小鳥のさえずりが鳴り響く空の景色はすっかり春の様相を呈していた。卒業シーズンということなのか、振袖姿の女子大生もちよくちよく見かけることができる。僕と靖はホームの柱に背を向けて女性陣二人が現れるのを待っていた。

「わくわくするな。コエちゃんの友達、かわええとええんやけど」
赤のYシャツにジーパンというラフな服装に身を包んだ靖はタバコを吸いながら僕の顔を見た。僕はチェックのYシャツにジーパンと黒のキャップをかぶっている。

「お前がわくわくしてどうするんだよ」

「なんだ悟、お前また完璧にこなそうなんて思ってたのやる？ホント、そんなんじやおもろいこともおもろくなくなってまうで」

「それが僕の生き方だから仕方ないさ。それより僕の話はユクエって呼んでくれよ」

「はいはい。それじゃ俺もバクつてことで」

靖が僕の姿勢に呆れた表情を浮かべ、タバコの火を消して吸殻を捨てると僕のケータイから着信音が鳴り響く。君からだつた。『着きました』と絵文字付の一言で表されている。僕はケータイをしまいい君を探しに行こうと靖のいる左側に体を向けると背後から肩を叩かれた。僕はびっくりして声を上げてしまい後ろを振り返ると、そこには君の姿があつた。あまりに君の笑顔が近かつたので慌てて僕

は一步後ろに下がった。

真っ赤な顔のままの僕を見て君と友達と靖が爆笑している。君はこの1ヶ月で長かった黒髪をばつさりと切り、ボーイッシュな印象さえ受けるほどだった。額を隠すようにきっちりそろえられた前髪とつやつやな黒い髪は太陽の光に当たることで一層輝いていた。フード付のピンク色の薄手のセーターに白のミニスカートがとてもよく似合っている。

「ごめんね。なんだか久々に会うから緊張ほぐしてあげようと思つてさ」

君は髪を切つて幼くなつたあどけない笑顔で冗談めかして言う。久々に聞いた君の声は相変わらず僕の胸に突き刺さるほど心地よかつた。隣で見ていた君の友達が呆然としている僕の目の前に来て言葉を投げかける。

「君がユクエ君？私コエの友達でさやかつて言います。よろしくね」「はい。ユクエです。よろしく。で、こっちが……」

僕が横にいた靖を紹介しようとする、靖は真剣な眼差しで表情を作りながらさやかに近づく。目の前で立ち止まると笑顔で挨拶を交わす。

「ユクエの友達のバクです。よろしく」

靖は鼻の下を伸ばしてさやかの手を握った。無意味なわざとらしい笑いを含みながら。

さやかは君と比べて落ち着いた雰囲気で大人を思わせる。茶髪でパーマのかかったセミロングのヘアにTシャツの上に羽織られたジャケット。君と同じくミニスカートではあつたが、君よりも小柄な体型に引き締まつた手足が覗かせていて健康そうなお姉さんといった感じだ。小さなピンクのポシェットをベルトと一緒に付けている。「もうそんな堅苦しい挨拶はいいから早く行こうよ」

君は我慢できないといった感じでまるで子どもものようにはしゃいでいた。いつの間にか横断歩道を渡って公園のほうへ向かおうとしている君を僕達は追いかけて、君に流されるように前へ進もうとする。

君には天性の人を引っ張っていこうとする力があるみたいだ。君のその明るい性格は僕も嫌いじゃなかった。完璧であるうとする僕の心に待ったをかけるパワーが君の笑顔には隠されていたのだ。

「大人4枚つと」

僕達は自販機で入園券を買くと動物園の中へ入っていった。動物園なんていつ以来だろう。僕達の前を幼稚園児達が駆け抜けていく。子供連れの夫婦の姿もちらほら見えて和やかでほほえましい気分になった。桜が舞う園内をはしゃぐ君に合わせるように進んでいく。

「見て見て。かわいいよ」

君は気持ちよさそうに眠っているパンダを指差してまるで子どものようにしゃいでいた。素でありのままをさらけ出す君の笑顔を見て、ネットがどうかという迷いは吹っ飛んでいた。ただ君の楽しい気持ちに合わせるように僕はそつと君の横に立ち君の顔を眺めている。そんな視線に君は気付こうともせずにはーっとしている僕に向けて大好きな美声を聞かせていた。

君に連れられて僕が合せているうちにいつの間にか靖とさやかの姿が見えなくなっていた。どうやらはぐれたらしい。どうせ靖のとだ、さやかと二人つきりになるためにわざとはぐれたのだろう。君と僕をくつつけようと思っっているのかもしれないが、それはあくまで表向きで本来靖は自分の本能のままに動く性格なのだ。案の定靖達を見失ったと気付いてから5分もしないうちに靖からメールが来て「こつちはうまくやってるから心配すんな」と送られてきた。

「ごめん、僕の友達がさやかさんに手を出しちゃったみたいで」

「ううん、気にしないで。それより二人つきりになったことだし、何かお話しよつか。カラオケのときそんなに話せなかったし」

君は二人つきりになった抵抗もなしに嬉しそうに僕に話しかける。見た目はお嬢様風でも気取らずサバサバした性格は何か惹かれるものがあつた。

「そうだね。それじゃあ時間も時間だし、食事にしましょうか」

僕は目の先に見える売店を見ながら君に首で合図を送った。家族連

れの親子や若いカップルでいっぱいのレストランではあったが、ひとつだけ丸テーブルに2つの椅子を添えた席が空いていた。僕は君に座ってもらいもうひとつの椅子に荷物を置く。

「何がいい？」

「それじゃあコーヒーとお好み焼きをお願いしちゃおうかな」

「了解。買ってくるからここで待ってて」

僕は君に背を向けて売店に連なる行列に足を運んだ。長い時間待たされていらいらしている人も多い。お昼時だから空腹でというのものもあるだろうし、暖かくなってくる季節だからというのものもあるだろう。事実暖かい春や夏のほうが冬よりも犯罪の数は多いと聞く。桜の花びらが何とかそんな気持ちを静めてくれる鎮静剤の役割を果たしてくれているのかもしれない。

僕の番が回ってくるとポップコーンと焼きそばとお好み焼きとコーラとコーヒーを頼んで、君の座っているテーブルまで運んでいく。戻ってきたとき、君は黄昏ていた。頬杖をつき右の誰もいない道を目指し思い思いに耽っている君の横顔。うつすら涙も零れているように見えた。君はケータイの画面を眺めながら何か呟いているようにも見えた。ハルキという言葉が微かに僕の耳に残った。こんな君の表情を見るのは初めてだったので、動揺しながらも僕は君に声をかける。「お待ちせ」

僕が声を発した瞬間、君ははっとして焦ったように手で涙を拭いて僕の顔を見た。いつものように下から僕の顔を覗き込むように。

「どうしたの？泣いてたみたいだけど」

「あ、これ？なんでもないよ。私花粉症なんだよね」

そう言っ君はもう一度目をこすってケータイをバッグにしまった。くしゃみも鼻水も流れていない。ハルキと呼ぶ人物のことが気になった。花粉症というには程遠い状態ではあったが、僕はあえて干渉しないことにした。

「おいしそうだね。早く食べようよ」

君がいつもの元気さを取り戻すようにコーヒーとお好み焼きの皿を

目の前に寄せると、僕はポップコーンを一緒に食べようと真ん中に置いた。君はコーヒーにミルクを入れてかき混ぜ、一口飲むとポップコーンに手を伸ばす。僕と手が合うと恥ずかしそうに笑顔を作って僕に譲る姿がかわいらしかった。

それから三時間ほどだろうか。君と語りあつたのは。そのほとんどがZEROの話題ではあつたが、大学生活のこと、ブログのこと、最近のニュースのこと……。話題は瞬く間に広がっていった。正直こんなにも君に心を開けるとは思っていなかった。それもまだ2回目だというのに。いつしか昔から知る大の親友のようなそんな雰囲気を作り出していた。君は左腕に付けた時計をちらつと見ると残っていたコーヒーを一気に飲み干し僕の目を見つめて言う。

「もうこんな時間になっちゃったね。そろそろさやかたちを探しにいこっか」

そう言つて君が席を立つと後ろから男が君の肩を叩いた。君は驚いて前のめりにテーブルに倒れこもうとするところを僕が腕を握つて支える。君の腕は細くて柔らかく温かい思いがした。君と僕が視線を向けた先には苦笑いを浮かべる靖がいて、その隣には様子を見て笑っているさやかもいた。

「悪い悪い、何かユクエとコエちゃんがいい雰囲気だったもんで脅かしてやるうと思つて」

靖の言葉に僕と君は顔をつき合わせて真つ赤になりすぐに視線をそらした。君と僕が声をそろえて「そんなんじゃないってば」という様子がおかしくて爆笑の渦になっていた。ふと空を見上げるとうっすらと太陽に赤みが差し、夕焼けが訪れようとすることを知らせてくれる。

「そろそろ帰ろうか？もうすることもねえし」

「待つて。私あとひとつだけ見たいところがあるんだけど、いいかな？」

君は僕の顔を下から覗き込むようにうるうるした瞳で見つめてくる。目から発せられる悲しみとは逆に顔は満面の笑みを浮かべていた。

いつからだろう。僕は微かなときめきを君に覚えていたことを実感した。セーターとシャツの間から覗かせる銀のペンダントの光が君を一層輝かせているようにも見える。

「やっぱいつ見てもかっこええな。さすがは百獣の王って感じや。コエちゃんも強くてたくましいライオンをみいへんと気がすまないんやな」

靖は柵に手をかけ身を乗り出し気味になりながら、ライオンを見つめる君の横顔に目をやった。夕日に照らされる君の横顔はさんさんと輝いてスポットライトを浴びているかのようだった。

「うっん、違うの。ライオンってね、強そうに見えるけど本当は孤独と戦ってる。自分は強いから誰ともつるまないんだって強がっているけど、すごく寂しいんだよ。それを一人でいることが強い証拠だって自分に言い聞かせていないと駄目になることがわかってるから誰にもなめられないようにいつも必死になっているの。まるで私たち人間みたいだね。私はそんな人間くさいところが好き」

まるで自分もいつも孤独で寂しいんだよと訴えかけているかのようだった。僕はさっき君が浮かべた涙のことを思い出していた。いつも元気で明るい君が見せたほんの少しの弱さ。爽やかな笑顔で語る君の横顔は今までで最も切なく儂げに見える美しさを保っていた。

5

春めいた景色はすっかり緑へと色を変え、僕達を包み込んでいく。大学内では来るゴールデンウィークの予定の話で持ちきりだった。やれヨーロッパだのやれ韓国だのやれ北海道だのといった会話が飛び交っている。この時期は履修登録さえ済ませてしまえば後は楽なもの。友達と遊びに行くことのほうが最優先課題となる。僕らのグループもその例に漏れなかった。

「ねえ悟はどこ行きたいの？」

智美はぼうつと何かを考え込むようにしている僕を見て話題を振る。

僕は驚き慌てて立ち上がるとぷつとみんなに大笑いされた。

「何かそれどころじゃないみたいだね。そんな慌てた悟を見るのは初めてかも」

秋元智美は大学のクラスメイトで靖よりも先に大学内で僕に初めて話しかけてきた人物だった。どうやら僕に好意を持っているらしく、何かと僕の手に触れたがる。はつきりした目立ちと小柄ながらスタイルのよさを保っていること、そして甘いハスキーボイス。一般的に見れば美人なのかもしれないが、彼女の度の過ぎたスキンシップはどうも好きになれずにいた。今もYシャツの胸元のボタンを開けて強調しているのを見ると、これでも落とせるとでも考えているのだろうかと思ってしまう。周りの評判がよく、人当たりもいい一緒にいれば何かと都合という理由で友達関係を保っているわけだが、周りからは恋人同士と勘違いされることもあって少し嫌な気分になる。それでも周りからの羨望のまなざしが気持ちいいという見返りはあるのだが。

「智美ちゃん、今の悟に何言っても無駄やで。こいつな、今メル友に……」

僕は靖がそう言いかけたところで左手で靖の口を塞いだ。僕はごまかすように作り笑顔を智美に向けて、慌てて靖をテーブルから離れた柱の陰に押しつける。

「靖、コエさんのことはみんなには言わない約束だろ？特に智美にばれるのはまずい」

「何言つてんのや。そろそろはつきりさせといたほうがええで。悟が体裁のためにこの状況を続けたいのもわかるんやけどな、お互いのためによくはないと思うで」

靖の言う通りだった。自分でもわかっていること。このままじゃダメだつてことを。誰からも好かれたいという完璧主義を貫き通してきた自分自身を否定するようで怖かったのだ。

春めいた景色はすっかり緑へと色を変え、僕達を包み込んでいく。大学内では来るゴールデンウィークの予定の話で持ちきりだった。やれヨーロッパだのやれ韓国だのやれ北海道だのといった会話が飛び交っている。この時期は履修登録さえ済ませてしまえば後は楽なもの。友達と遊びに行くことのほうが最優先課題となる。僕らのグループもその例に漏れなかった。

「ねえ悟はどこ行きたいの？」

智美はぼうつと何かを考え込むようにしている僕を見て話題を振る。僕は驚き慌てて立ち上がるとぷつとみんなに大笑いされた。

「何かそれどころじゃないみたいだね。そんな慌てた悟を見るのは初めてかも」

秋元智美は大学のクラスメイトで靖よりも先に大学内で僕に初めて話しかけてきた人物だった。どうやら僕に好意を持っているらしく、何かと僕の手に触れたがる。はつきりした目立ちと小柄ながらスタイルのよさを保っていること、そして甘いハスキーボイス。一般的に見れば美人なのかもしれないが、彼女の度の過ぎたスキンシップはどうも好きになれずにいた。今もYシャツの胸元のボタンを開けて強調しているのを見ると、これで誰でも落とせるとでも考えているのだろうかと思ってしまう。周りの評判がよく、人当たりもいい。一緒にいれば何かと都合という理由で友達関係を保っているわけだが、周りからは恋人同士と勘違いされることもあって少し嫌な気分になる。それでも周りからの羨望のまなざしが気持ちいいという見返りはあるのだが。

「智美ちゃん、今の悟に何言っても無駄やで。こいつな、今メル友に……」

僕は靖がそう言いかけたところで左手で靖の口を塞いだ。僕はごまかすように作り笑顔を智美に向けると、慌てて靖をテーブルから離れた柱の陰に押しつける。

「靖、コエさんのことはみんなには言わない約束だろ？特に智美にばれるのはまずい」

「何言ってるのや。そろそろはつきりさせといたほうがええで。悟が体裁のためにこの状況を続けたいのもわかるんやけどな、お互いのためによくはないと思うで」

靖の言う通りだった。自分でもわかっていること。このままじゃダメだってことを。誰からも好かれたいという完璧主義を貫き通してきた自分自身を否定するようで怖かったのだ。今まで当たり前のように傍にあったものを失うことほど怖いものはない。僕にはその勇気がなかった。

僕と靖がテーブルに戻ると智美の姿はそこにはなかった。次の授業のために早めに食事を済ませて席を後にしたと、残っていた大柄で頼りがいのある勇馬と長身でモデルをやっている彩が言う。僕は少しほっとした気になりながら食事を再開した。次の授業は空いていたので余裕があったのだ。

「お前、女ができたんだろ？」

「な、何言ってるんだよ。そんなわけないだろ」

勇馬の突然の台詞に動転している僕がいた。大きな口にパスタを頬張りながら勇馬はにんまりと笑みを浮かべる。

「お前は気付いてないと思ってるみたいだけど、俺たちはとっくにわかってんだぜ。お前の本当の気持ちをさ。もっとも智美は気付いてないみたいだけどな。お前、いつも眉間にしわを寄せながら話すだろ？利益ばかり追求してちゃダメだと思っぜ。もっと自分の気持ちに素直になれよ。そのほうがすっきりするぜ」

「うるさい、勇馬なんか何がわかるって言うんだ。周りから認められたいと思っただけが悪い。僕は君たちみたいに気楽に生きていくってというのが嫌なんだ。自己嫌悪になる。自分が許せなくなるんだ。

それでも本音でぶつかれて言うのか？それが正しいって言えるのか？それなら君たちとはここでおさらばだ。じゃあな、バイバイ」

僕はそう言ってたんかを切り、立ち上がって食堂から出て行った。勇馬と彩は呆然と僕を目で追うことしかできずにいたようだ。わかっている、わかっているんだ。本当は素直に自分をさらけ出して生きていかなければならないことを。だけど核心を突かれたようで腹が立った。僕の完璧主義を否定されたようでプライドが傷つけられたのだ。理想と現実。現実には僕が思い描いているように完璧ではない。

「どうしたんや、お前らしくもない」

靖が息を切らしながら廊下を歩いてきた僕に向かって走ってきた。今の言動を見て心配してくれたようだ。本当の僕をさらけ出せる唯一の友達。僕は作られた笑顔から弱気な本当の僕に表情を変えた。

「なんか、本当のことを言われて自分が嫌になっちゃったんだ。いつかこうなるとは思ってたんだけどね。はは、バカだよな僕も」

泣きそうだった。僕が完璧主義を貫いてきたのはこうだった面倒なしがらみから解放されるためだった。だけど今自分がしてしまったことはそれとは正反対のことだったのだ。

「メールでもいいからちゃんと謝つとけ。でないと後悔するだけやで。自分の弱さをさらけ出すことも強いことなんやで。それを忘れちゃあかん。本当にすごいんはな、誰にも弱さを見せないんやのうて、弱い自分を認めること何やで。覚えときや」

僕はこのとき初めて人前で泣いた。靖の陰で隠れるように縮こまりながら。靖の一言が身に染みだ。変わらなくちゃいけない。そう思える瞬間だった。弱い自分を見せることは相手を認めること。僕はそのことをこの日初めて思い知った。今までの僕は何を求めているのだらう。本当に欲しかったものは名声でも体裁でも見栄でもなかった。それは心から大切だと思える親友だったのだ。今までなぜそのことに気付かなかったのだらうか。

孤独でいることが強いことと思いついていた傲慢さが引き寄せた結

果がこれだ。これからは素直に生きたい。そんなことを思うと君の顔が自然と浮かんできたんだ。僕はすぐさま勇馬に「ごめん」とメールを送った。本当は僕を心配してくれる友達がいる。それだけで嬉しかったのだ。勇馬からの返事はあっさりとしていた。「こっちこそごめんな」。短いその一文だけで僕にとっては十分だった。

「これでようやく心配事もなくなったわけやな」

「……心配事？」

「そや。悟がいつまでも完璧主義を貫こうとするもんやからコエちゃんも心配しとったで」

「コエさんが？」

僕は慌てて靖に聞き返した。メル友という関係でしかない君が僕のことを心配してくれるなんて夢にも思わなかったからだ。動揺して声がうわずっている。

「で賭けとったわけや。俺が本当のお前のことをみんなに言ってお前が変われるかどうかを試そうってコエちゃんと勝負でな。もしお前が変われたらゴールデンウィークにコエちゃんたちと遊ぶっていう約束やったんや」

まんまとはめられた。このけんかも展開も僕がこうして変わろうとすることも全て靖と君が仕組んだ演技だったのだ。いや、けんかになってしまったのは僕がたんかを切ったせいなのだから正確には全てがフィクションとは言えないのかもしれない。ただ靖にはこうなることは僕の性格をよく知っているがゆえに読めていた。僕は靖の作り出した物語上の登場人物の一人として踊らされていたのである。

ただ靖と君を怒る気には不思議となれなかった。二人とも僕のためを思ってたってくれたことだ。やり方はどうであれ、二人の優しさの琴線に触れたような気がしてむしろ嬉しかった。

5月4日、快晴。どうもイマイチみどりの日という感じのしない日だ。従来の4月29日を昭和の日にしてこの日にみどりの日に移したことに何の意味があったのだろうか。結局同じ祝日であることは変わらないし、昭和天皇の誕生日が4月29日であることに変わりはない。だからどうしたのだと言いたくなる。

花びらが乱れ落ち緑の木々が一層青みを増し、暖かい晴れ間が覗く。衣替えを迎えたこの季節は肌の露出の増えた若者が街の雑踏に溶け込む。ここ新宿の街は普段なら見かけるスーツ姿にネクタイをしたサラリーマンが身を潜め、ここを起点に次の目的地を目指さんとする二十代前後の男女が道狭しとひしめき合っている。普段よりもおしゃやかなファッションでこれから起るであろうことに好奇心を抱きながら電車に乗り込んでいく。西口から見える電気店ではないかにライバルを出し抜こうとゴールデンウィーク商戦が始まっていた。

「おはよ、待った？」

「いや、全然」

JRの改札口の柱に立っていた僕を見つけていつもと変わらない笑顔で下から覗き込むように現れたのは君とさやかだった。明るめの色で鮮やかに染まった君の肩までかかるその髪は、いつも黒髪を見慣れていた僕には新鮮に映った。水玉模様のワンピースに白のキャスケットをかぶった君の姿がとても爽やかだ。僕の、意味不明な英語がプリントされたTシャツにジーパンというラフな姿とは別次元のものに思えて少し恥ずかしかった。

「さて、みんな揃ったことやし、これからどこ行くんや？」

「さやかか、ゆりかもめに乗りたいてって」

「ゆりかもめ？」

「はい。何か海の潮風って気持ちいいですね。ゆりかもめから見える景色も好きで」

さやかは丁寧な口調でやはりお嬢様の雰囲気や白を貴重としたファッションセンスからも窺わせた。君とは違っておっとりとしたタイプでだからこそ行動的な靖とは案外気が合うのかもしれないと思った。

「ほんならとりあえずは新橋やな」

そう言っただけでホームへ向かうと切符を買って僕達は新橋へ向かうため山手線に乗り込んだ。ゴールデンウィークで混雑している満員電車で揺られながらイヤホン片耳に音楽を聴く人、ケータイ片手にメールをする人、読書にいそしむ人、居眠りをする人、化粧を人前で堂々としている女性……。ひとつに電車の中の人と言っても様々でその人の性格が縮図となって現れているような気がした。

新橋に着いた僕達は八百円を払って一日乗車券を買って、ゆりかもめに乗り込んだ。一日乗車券にデザインされているキャラクターのかわいさに笑みを浮かべる君の顔が僕にはまぶしく見えた。靖が持ってきたチューイングガムを噛みながら僕達は自動運転で進むゆりかもめの景色を眺めている。意外にも一番はしゃいでいたのはさやかだった。

「見てみて、靖君。船が見えるよ」

「ほんまやな。今日は天気もええし、思いっきり楽しめそうやで」
いつの間にかこの二人はそういう仲になっていたらしい。靖がさやかの肩に手を触れて揺れ添うように窓の近くに寄っていた。なんだかこの雰囲気壊したくなくて、僕と君はなぜだかわからなかったけれど、お互いの顔を見て声にならない笑いを作っていた。

最初に降り立った地はお台場。フジテレビのど真ん中だった。さすが行楽地の定番と言っただけあって家族連れやカップルで賑わっている。夏休み恒例のイベント・お台場冒険王のような催し物がなくともでんと構えた立派な建物と長い中央階段には圧倒させられた。

僕は階段を上った通路脇のエスカレーターから下に降り、テレビ番組の写真が貼ってある展示コーナーへと足を運ぶ。そこは夢で溢れていた。バラエティ番組の普段見逃してしまいそうなゲストの表情、ドラマでの決め台詞を言う主役の俳優、アニメの名場面を思い起こさせるようなベストシーン。そこには僕達にはないオーラがはつきりと見えていたのである。

奥に進むとそこにはテレビですっかり馴染みのお昼のバラエティ番組の収録が行われているセットが見えるコーナーが置かれていた。ガラス張りになっていてその先を下に覗き込むと、いつもはお茶の間で見るタレント達の収録風景が手に取るようにわかる。収録ではカットされてしまうような普段見せない表情を浮かべるタレント達に僕は釘付けになり、目を輝かせて見つめていた。

「私、芸能人初めて見るよ。いつもライブとかでしか見たことないもん」

「僕もそうかな。芸能人なんて普段プライベートで見ないし」

「俺は見たことあるで。関西にいたころやけどな」

僕は尊敬のまなざしでへえと相槌を打った。靖の誇らしげの態度に思わずぶつと吹き出してしまった君の顔を僕は見逃さなかった。君はそんな僕の視線に気付かず再びバラエティ番組の司会者に目をやると、普段はテレビ越しに見ている相手に向かってガラス越しに手を振っていた。

テレビ収録見学の場所を離れると奥にはバラエティ番組の宣伝用看板があった。芸人の顔がくりぬいてあって、顔を出して記念写真を撮るといふもののようなのだ。くりぬかれているのは男女1人ずつ。そこには多くの家族やカップルが群がっていた。顔だけ自分のものということで芸能人になった気分になれる。プリクラの立体版といった感じを受けた。

「ねえ、私たちもやってみようよ」

「うん」

僕は君の腕に引っ張られながらボードの列に並ぶ。君の柔らかくて

温かい二の腕がなんだか恥ずかしくて君の顔をまともに見られずにいた。その天真爛漫な明るさが僕の心を動揺させるのかもしれない。すぐ後ろに僕らを追いかけるように並んだ靖とさやかはにやけて今にも吹き出しそうなのをこらえるような表情で僕の顔を眺めていた。冷静に装わなければならぬ。そんな風に思っていた。今までの僕自身が恥ずかしくなって僕はさらに赤面していたのだ。

一人また一人と撮影を終えていく。笑顔で自分の番を後にする光景が印象的だった。小さな子どもが君に向かって手を振ると、君は満面の笑みでそれに応える。その天使のように笑う顔は僕自身も癒されていた。

僕らの番がやってきた。さやかと靖が先にボードに顔をうずめ、君がデジカメで二人の最高の笑顔の写真を撮る。二人の笑顔からは白い歯がこぼれ、妙にお笑い芸人のボードとマッチしていて笑いを誘った。靖は君からデジカメを奪い取って僕と君の背中を押す。

「次はお前らの番やで」

僕と君は靖とさやかに髪の毛を押さえつけられ顔をつき合わせられると、なんだか恥ずかしくなって顔を背けてしまった。その頬を赤めるしぐさは純粋な僕と君の心を表しているようだった。

「ユクエ、もっと笑いな。につて」

自分の中では笑っているつもりでも引きつってしまっていた。今まで完璧主義を貫いてきた僕は周りに合わせての作り笑いは得意でも自然な笑みを浮かべることは苦手としていた。そして今日は隣に君がいる。女の子が苦手なわけではなかったが、どうしても防衛本能が働いて君から見ておかしくないように振舞ってしまう。それはさながら職業病に似ていて、簡単に克服できるものではなかった。

「ほら、そんな顔してないで。苦手なのはわかるけどさあ」

「うん」

僕は冷静さを取り戻そうとするが、うまくいかない。作っては消える笑顔。こわばった僕の表情を下から覗き込むように見る君は満面の笑みで僕の顔を見ると、僕のわき腹に指でなぞるようにくすぐ

り始めた。僕はたまらず声を上げて君の指を避けるように体をそらしていく瞬間にパチツという音とフラッシュが光った。デジカメに現れた写真には、僕をくすぐるのに夢中で横を向いた君と仮面の下から覗かせる笑みを振りまいた僕が映っていた。それを見た瞬間、僕達4人は声を上げて爆笑した。

「こりゃ傑作やな。いい画が撮れてんで」

「ホントですね。コエ、正面向いてないし」

「恥ずかしいなあ」

君は頬を赤らめてごまかすように頭をかく。これが僕と君が一緒に映った最初の写真かと思うと、なんだか申し訳なくなってきた。僕達はネットという仮想の世界での友達から現実世界の友達へと変わろうとしている。いわゆるリア友というやつだ。お互い顔の知らないもの同士が普通の友達と同じように笑みを浮かべる。なんだか抵抗があつた今までの僕自身がバカらしく見えてきた。

展示コーナーを後にして向かったのはゴールデンウィークで賑わいを見せる正面の階段を上った先にあるイベント広場。たくさんのお店が並んでいて、お祭りモード全開といった感じだ。靖とさやかはたこ焼き、そして僕と君はクレープに分担して並ぶことになった。お昼を過ぎて日が差し、まるで初夏のような暑さが行き交う人々の背中を照らしていた。

「なんか暑くなってきたね。そうだ、これ飲む？」

そう言つて汗をタオルで拭いながらバッグから取り出した水筒から紙コップに飲み物を注いで僕に手渡した。

「ありがとう」

僕が受け取ると、君は自分の分も注いで豪快に一気に飲み干す。そんな君の横顔を見つめている僕の顔を下から覗き込むように見る。

「どうかした？私の顔に何か付いてる」

「いや、そうじゃなくて……コエさんもそんな豪快に飲むんだなあ
つて」

「意外だった？私、結構男の子っぱいって言われるんですよ。両親にはもつと女の子らしくしなさいって言われるんですけどね」

「コエさんはその飾らない人柄がいいんですよ。親しみやすいし」「ありがと。やっぱりユクエって優しいね」

君のほうが優しいよと言いかけて言葉を飲んだ。優しいという言葉。今まで僕には重い言葉だった。表面だけの優しさ……相手に好意的に思ってくれるための優しさ。僕が与える優しさは自己満足でしかなかった。それは偽善者以外の何者でもなかったのだ。けどどこにいる僕は違っていた。本当の意味で心から出た気持ちだ。そのことに対して優しいと言われたことが素直に嬉しくて、笑顔で照れをごまかしていた。

白い丸テーブルを囲んで僕達4人はクレープとたこ焼きをつまみながら話し込んでいる。話題は普段どんなことをしているか、つまりプライベートについてだった。話題を振ったのはもちろん靖だ。

「俺らこうして遊びにも行くようになったんやし、そろそろ自己紹介してもええんとちゃう？」

「そうだね。じゃあまず私から。本名は春川詩織って言います。詩織の詩をもじってコエってハンドルネームにしてみました。今まで通りコエって呼んでくれていいですよ。9月に二十歳になる成城大の2年です。趣味はカラオケとライブとインターネットです。よろしく」

君ははにかんだ笑みを浮かべると、ぺこりと頭を下げた。隣に座っているさやか わき腹を突付いて次はさやかの番だよ、と声をかける。

「えっと、詩織の友達の御堂さやかって言います。私も詩織と同じ成城大の2年ですね。趣味は読書と映画鑑賞です。詩織とカラオケやシヨッピングに行ったりもしますよ。早生まれなので誕生日はまだまだですけどね。よろしくお願いします」

靖がオーバーに拍手をすると、それに合わせるように僕と君も同

じ行為をした。そして靖がたこ焼きをひとつつまんで口の中にほおると、咳払いをして僕と肩を組む。

「俺は沖本靖、こいつのダチつうとこやな。こいつとは元々ブログで知りおうてんのやけど、大学内では唯一こいつが本音で話せる仲になつとつた。誕生日は4月やので二十歳の中央大2年。コエちゃんたちとタメやつたんやな。趣味はネットで『出会いの広場』つちゆうサイトも立ち上げとる。よろしく頼むで」

靖は関西人特有の明るさとサービス精神でアピールした。このキャラクターが多くの人を惹きつけるのだ。この、ありったけの明るさのセンスには僕も憧れざるを得なかった。誰とでも仲良くなれる靖だからこそ、僕は彼を信頼し唯一親友として付き合っていていけるのかも知れない。

靖が考え事に耽って止まっている僕のわき腹を突付いて次はお前だと小声で囁く。それに驚いて立ち上がった僕は、一回咳払いをして冷静を取り戻してから口を開く。

「僕の本名は今田悟って言います。呼び方は今まで通りユクエでも本名でも構いません。コエさんと出逢ったのはライブ会場だったんだけど、その後ブログを通じてメール交換するようになって仲良くなりました。皆と同じ大学2年生で靖とは同じ大学の友達です。趣味は音楽とネットかな。よろしく」

抑揚のついたはつきりとした声で淡々と言葉をつなぐと、君の拍手からみんなの拍手が起こった。これまでずっとメールをしたり会っていたりしていたのに今更自己紹介をするのがどこか異様で照れくさかった。だけどバーチャルな住人から現実社会に存在する一人の人間としてここでちゃんと出逢った。その証が今ここで話していることなんだと思うと、後から嬉しさが込み上げてきて胸に微かな熱さを覚えた。

「二人は彼氏とかいるん？」

「私はいないですね。別れてからなかなか次に移れなくてももう半年ばかり」

「へえ、そんなんや。何なら俺と付き合わん？」

「え？あ、はい。よろしくお願いします」

さやかは呆気に取られた感じで靖への返事に即答した。照れくさそうに口に付いたソースをペーパーナプキンで拭い取りながら。靖は嬉しそうに隣に椅子を近づけてさやかの頭を撫でる。

「何だ、靖君とさやかかってまだ付き合ってたなかったんだ」

「僕も二人は付き合ってるのかと思ってたよ」

僕と君は二人の様子を見て言葉を投げた。靖はクレープを一口かぶりつく握っていたさやかの手を離して僕と君の目を見る。

「俺もな、実はそう思うてたんよ。もうキスも済ませとってんし。」

「だけどや、ちゃんと言うてなかったもんでこの機会にと思つてな」

「もうキスも済ませてるって……、相変わらず靖は手が早いな」

僕には恋人でないうちからキスをするなんて考えられないことだった。お互いそういうムードになったから結果的にそうなったのだから。友達同士が気持ちを確かめ合うためだけに行つた。その積極的に相手を信じていなければできない行為は僕には重すぎて押しつぶされそうなくらい不安に襲われること。それを平気のできる靖を羨ましいと思つ反面、価値観の違いから嫉妬をすることはないだろうとも感じた。

「コエちゃんはどんなん？やっぱり彼氏はおるんか」

二人が結ばれて安堵の表情を浮かべていたところに急に振られた君は慌ててドリンクに口をつけた。

「私はいないと言えはいないし、いると言えはいるか」

「なんやそれ。答えになつたらんやないか」

君は靖に問い詰められると、張り詰めていた緊張が一気に解放されたように笑顔が消え、涙を零し始めた。それはあの時見た一粒の涙と同じ、心の底から湧いてくる普段の君からは想像できない表情だった。

「……別れた。うん、別れたんだ。ずっと、ずっと好きだった。だけどあの人はもういない。もういないの。私の前から姿を消してし

まった。電話をしてもメールをしても返事がない。何も言わずにたださようならの一言だけ一方的に残して消えてしまった。あの人のいない日々なんて耐えられない。何度も、何度もそう思った。何日も泣き続けた。けどあの人はもう戻ってこない。戻ってこないの」

こんなに取り乱した君を目の当たりにして僕達は どうしていいのかわからなかった。君の目の前にあるたこ焼きとクレープが涙に濡れていく。泣き崩れていく君はいつもの明るく元気な姿とは対照的でどこか痛々しかった。ずっと抱えてきた想い。それが溢れ出してきた感情が抑えきれなくなったのかもしれない。誰にも悩みを打ち明けることができず一人苦しんでいたのかもしれない。僕は最初に君が流した涙とともに口にしたハルキという人物がその相手なんじゃないかと感じていた。

僕達はそんな君に気付いてあげることができなかった。深い罪悪感による重い沈黙が立ち込めている。その沈黙の殻を破ったのは君の親友のさやかではなく、行動派の靖でもなく、僕だった。僕はテールブルに顔をうずめて泣いている君の背中を擦ると、ゆっくりと柔らかい声で言う。

「そろそろ移動しようか。もう日も暮れてきちゃったし」
持っていたハンカチをポケットから取り出し、君に手渡すときに小さくありがと、と囁いた。その言葉だけで僕は少しの罪悪感から先に進める気がしていた。僕がどこかに移動したかったのはこんな弱気になっっている君をこれ以上見たくないと思ったからでもあった。僕は自然と手を差し出しふらつく君を支えるように手を握っていた。君が困っているときに僕が一步殻を破って前に出なければいけない。そう思った。体裁なんて関係ない。君を想う気持ちだけが僕を突き動かしていた。

涙ですっかり落ちてしまった化粧から覗かせる君の顔は暗い表情を保ったままだった。だけど時折いつもの明るい笑顔を覗かせてくれるのが嬉しくて、僕は君を安心させるために君の手を握ることを忘れなかった。靖とさやかが晴れて恋人同士になり明るい表情で会

話をしながら後ろを付いてくるのとは対照的だった。

お台場を後にして僕達がやってきたのは青海駅だった。海に囲まれた中にある観光スポット、パレットタウンのある駅だ。周りにはシヨッピングモールが栄え、脇にはモーターショーでも行われているのか自動車が展示されている。ゲームセンターも正面にあり、上はビリヤードやカラオケができるようになっていて。ゴールデンウィークということもあって、たくさん歩く人が行き交い賑わいを呈していた。親子連れ、カップル、若い数人のグループ……。目的は様々でもこの場所にある何かを求めて暮れゆく街に集まっている。何度かライブでZeppには来たことがあったが、それ以外のことでこの地に訪れるのは初めてだった。

僕は何のためらいもなく東京ゲームランドと書かれたゲームセンターに足を踏み入れた。日を落としたゲーセンの中にいるのは大抵が少年少女、二十代の若者で、賑わいは静まり返りそうもない。黄色い女性の声、野太い男の声、ゲームに熱狂している声……。それらが幾重にも重なって、奇妙な音色を奏でている。

「悟、ゲーセンなんか連れてきてどないするつもりや？」

「靖君は黙ってて。ここは悟君に任せて私たちは私たちが楽しもうよ」

「ああ、そやな。さやかちゃんがそう言うんなら」

靖とさやか僕と君に気を遣って奥に消えていくのを確かめると、僕は君にアイコンタクトを送ってUFOキャッチャーを指差す。

「僕たちもちっと遊んで行こうか」

「うん」

落ち込んで下を向いている君は、いつものはつきり通った声とは裏腹に蚊の鳴くような小さな声で頷いた。僕は君の肩にそっと手をやると、両替をしてからUFOキャッチャーにそっと一緒に近づいていく。ひとつだけ空いている台にコインを入れると、僕はボタンを操作して動かす。普段こういったゲームをやらない僕はそれでも

君のために必死になった。けどあと数センチのところを取れかかったぬいぐるみは弾かれてしまった。

「あとちよつとだったんだけどな。コエさんもやってみない？」

「……え、私？」

君は急に振られて驚いたように目を見開いて声を上げた。神妙な面持ちの君に僕は笑顔で語りかける。君はそれに応えるかのように無理やり笑顔を作って台の前に身を構えた。震える君の手を支えながら二人でボタン操作する姿は自然で、気持ちが繋がっていた。君がいつものように下から僕の顔を覗き込むと、いつもより至近距離のせいか君は照れてしまつてすぐに視線をそらしていた。その視線に気付くともなく、僕はガラス張りの機械に集中している。アームがちようどぬいぐるみの上に重なったとき、僕は君の手を強く引いてボタンを押した。アームはがっしりとパングのぬいぐるみを掴み、ゆっくりと出口の穴に落ちていく。

「やった、取れたよ」

君ははしゃいで僕の両手を取つて思いつきり小刻みにジャンプしながら叫んだ。周りで見ていた若者達は一斉にその姿を見て拍手を送る。

「やっと、やっと笑つたね。やっぱりコエさんには笑顔の方が似合うよ」

「ありがと。ごめんね、心配かけて」

君ははにかんだ笑顔でいつもの明るい表情を取り戻していた。君は僕の腕を引っ張り奥のスロットマシンを指差す。

「次はあれやろうよ」

「うん、行こう」

童心に返つたようにはしゃぐ君は輝いていた。少なくとも僕には悲しみを越えて強くなったように見えていた。時間も忘れるくらい動き回り汗をかいて疲れて、売店でドリンクを飲んでいるところで輝かしい汗をタオルで拭きながら靖とさやかが現れた。

「そんなに汗ばんでどうしたんだよ」

「ちょっと二人でボーリング行ってきたんよ、上で」

「ずるーい。二人だけでボーリングなんて」

「しゃーないやる。コエちゃん凹んでんし、ここは悟に任せたほうがええと思うたんやから」

「それは……心配かけてごめん」

しゅんとなった君を見て、僕らは笑った。バカにしないでと反論する君の姿がかわいくて、僕は余計にからかってみたくなった。君がそれに怒って僕の右足を踏みつけて痛がっている僕を見て、靖とさやかは再び笑い出す。

「何はともあれ、コエちゃんが元気になってよかったやないか。悟の作戦勝ちやな」

「……作戦？」

「ここに連れてきてよかったちゆうことや」

みんなが僕の顔を見て頷いた。君にありがとうなんて言われるとちよつと照れる。頭よりも体が先に動いていた。君と一緒に居ると自然と何かに突き動かされた気持ちになる。周りからどう思われているのかなんてどうでもよくなって、君のために何かしてあげたいと思う。それが好きっていう感情なのかもしれない。僕はこのときはつきりと気付いた。薄っぺらな利用価値どうのこうのなんかじゃなく、君が好きなんだということ。

僕達がゲームセンターを出てこの日の最後に選んだのはパレットタウンの代名詞ともいうべき大観覧車だった。ゲームセンターの目の前に聳え立つ円形の車輪は真下にライブに参戦するどこかのアーティストのファンが埋め尽くす Z e p p が、反対側には微かにフジテレビや海の見える絶景スポットだ。夜空の下には多くのカップルが行列を作るほどの人気振りが窺える。

僕達は君と僕、靖とさやかの2組に分かれてチケットを取った。下が見えるタイプと周りが覆われているタイプの2種類があるらしく、僕と君は僕が高所恐怖症ということを理由に後者、靖とさやかは前

者を選択した。

「んじゃ、お前らも楽しむんやで。お先に」

「また後でね」

靖とさやかが手を振って観覧車内に乗り込んでいった。それを見送るとすぐに次の観覧車がスタッフの手によって運ばれてくる。

「気楽でいいよね、できたてほやほやのカップルは」

「そうだね。友達同士だとどんなに気まずいことか」

「それは言ってるかも」

君は口元に手を当てて笑った。君が観覧車に先に乗ると、僕は君の手に導かれて中に飛び乗った。君は左手を車内のドアに突いて、その反動で僕を引き込んだ。君の柔らかく優しい手の温もりが離れた後も残っていて、一時的なドキドキ感に襲われていた。君は観覧車が動き始めると、左手で頬杖を突きながら後ろの窓から景色を眺めている。物思いに耽っている君を見る僕の視線に気付いたのか、君は笑顔を作り僕に「どうかした？」と言葉を投げかけた。

「やっぱりその、まだ彼氏のこと想ってるのかなと思ってさ」

君は期待通りの困った表情を浮かべて、一瞬の間沈黙が生まれる。

眉間にしわを寄せて上げられた顔は自然体の君自身の表情を映し出しているように見えた。

「ホントはね、もう頭の中ではわかってるんだ。彼が戻ってこないってこと。だけど、どうしても認めたくなかった。もう私の隣に彼はいないってことを信じたくなかった。いつか私の元に帰ってきてくれる。もし彼が戻ってこないと思ってしまうたら、彼が戻ってくる場所を奪ってしまうみたいで怖かったんだ。

彼、ハルキはとっても優しい人でいつも私を見てくれた。いつかピツグになるんだっていつも言っていて、そのことを語るときのハルキの目は輝いていた。どんなことがあっても私を守って約束してた。だけど、本当は私だけがそう思っていたのかもね。突然音信不通になっちゃうんだもん。そのときから私の心にはいつもハルキがいて、いないことを実感しては怖くなっていた。自分を責め続けてきたんだ。

でももうそれも今日で終わり。私も卒業しなきゃね。前に進まなきゃね。ユクエ君も変わろうとしてるんだもん、私が変わらなきゃどうするんだって感じたよね」

僕が黙っているのを見て君は心配そうに下から覗き込むように僕の顔に近づく。

「ごめん、こんな話されてもって感じたよね。ただなんかユクエ君には聞いてもらいたくてつい……」

僕は言葉をつぐむように君の唇に僕の唇を重ねていた。君は突然のことにはわけもわからず目を見開いたまま固まっている。2、3秒ほどだっただろうか。君の唇は柔らかく甘い香りがした。これがファーストキスというわけではない。だけど君と交わしたこの日の蜂蜜のような味は特別においしかった。僕は観覧車が頂上に辿り着いてがたと大きく揺れるのに怖くなって、君から離れた。

「……ごめん」

「謝らないですよ。私まで恥ずかしいじゃん」

「ごめん。だけどこれだけは信じてほしいんだ。僕は本気じゃない人に軽々しくこんなことはしない。君が彼のことを忘れられないのはわかってる。でも僕も君に本気なんだ。コエさんのことが好き、なんだ。もし僕を受け入れられる日が来たらそのときは……」

僕の顔はこわばっていて、感極まって涙が一滴零れそうになっていた。君はそんな僕の顔を見てバッグからハンカチを取り出し僕に渡すと、自然な笑顔で僕の想いに応えてくれた。

「ありがと、すっごく嬉しいよ。私もユクエ君のことは好きだよ。今はそんな気持ちになれないけど、もし彼のことを忘れる日が来たらそのときはよろしくね。けどもうこんなことしちゃダメだよ、わかった？」

「……はい」

君はまるで幼い子に諭すような柔らかい口調で曖昧な答えを僕に与えた。君は僕の頭を撫でながら僕の後ろに映る景色を見て指を差す。

「あ、見てみて。星空がきれいだよ」

僕はドキドキした胸と震える足を押さえながら窓をちら見した。そこに広がる夜景には青白く輝く満月とそれを彩る一等星が広がり、ロマンチックなムードを作り出していた。光の反射で輝く君の横顔もいつも以上に映えていて、この瞬間がいつまでも止まっただけでいいと僕は心の底からそう思っていた。

「ねえねえ、ここで写真撮ろうよ。さつきちゃんとした写真が撮れなかったし」

「いいんだけど、僕は……」

「大丈夫。怖いなら私だけユクエ君の隣に移動して撮るから」

「うん、それなら」

君は少しだけ揺れる観覧車の動きにびびってる僕の手を握りながらバッグから取り出したデジカメを持ち、僕の隣に移動すると僕の肩に手を回し、左手に持ったカメラを前に突き出してシャッターを3回押した。びくついていてる顔、照れている顔、引きつりながらも笑顔を作っている顔。3種類の僕の表情に君の笑顔が重なった写真は恋人なんて肩書きがなくても心はつながっているように見えていた。月と星々の光がフラッシュの代わりになって微妙な色を僕達に付けている。

一周を終わり観覧車から出てくると、先に降りていた靖とさやか
がアイスを食べながらこちらを発見して手を振っていた。僕と君は
笑顔で手を振り返し、彼らの元に近づいていく。目の前まで来ると、
靖は僕の肩に手をかけて僕を引っ張り出して小声で囁く。

「どうやった？」

「……どうだったって？」

「だからコエちゃんと上手くいったんかっちゅう話や。2人きり、
しかも男と女で観覧車に乗って何も無いわけないやろ」

「……告白したよ。キスもした」

「ほんまかいな。そりゃ急展開やな。で、コエちゃんはなんて？」

「今はそんな気持ちになれないけど、彼を忘れられる日が来たらよ

ろしくねって」

「なんや、微妙なニュアンスやな。……でもま、振られてないだけチャンスはあるっちゅうことやと思って、前向きに考えたほうがええで」

「もちろんそのつもりだよ。コエさんには今まで感じたことないほど心が動かされてる。僕は諦めるつもりはないから」

靖がぼんつと僕の背中を押すと、君とさやかのいるところまで戻る。君は訴えるような目で僕を見つめる。

「お腹減ったな。最後にみんなでラーメンでも食べて行かない？」
「そうやな。ほんなら俺がさやかの分、悟がコエちゃんの分おごるってことでええんとちゃう？な、悟」

靖は僕の肩に手をぼんと置いて耳元でチャンスやだと囁いた。

「そうだね。女性にお金を使わせるのは悪いし」

「大丈夫？無理してない？私たちなら大丈夫だから心配しないでね」
「ありがとう。だけど、今回は驕らせてよ。遠慮せずに何頼んでもいいから」

「わかった。じゃあお言葉に甘えさせていただきます」

君はくつたくない笑みを浮かべて僕に応えた。ラーメンなら新橋に戻ってからのほうがという君の発言を受けて、僕達は再びゆりかもめに乗る込む。ゆりかもめには行楽を終えた若者や家族連れの子が無造作に入り乱れていて、疲れきった足を支えながら多くの人が手すりやドアに寄りかかって満員の電車に揺られている。僕達はそんな集団から外れるようにドアの横に小さく固まって小声でおしゃべりをしながら終点に着くのを待った。

「やっと着いた。詩織の知ってるところってどこなの？」

「さやかは知らないんだっけ？ほら、彼と昔一度だけ来ておいしいって言ってくれたとこだよ」

「そっか、あそこか」

靖は渋い顔で二人の間に入って行く。僕の顔色を窺いながら。

「ええんか、そんなと俺らに紹介して。また悲しくなって泣かれ

ても敵わへんで」

「心配してくれてありがとう。でも関係ないから。忘れるって決めただ。だからこれからはみんなとの思い出を作りたい。そのため紹介したいんだ」

「……そっか。コエちゃんがそう言うんならえんやけどな」

「とにかく連れてつてよ。そのおいしいラーメン屋に」

「オツケー。じゃあしつかり付いてきてね」

君は少し足早に先頭に立って僕達を先導していく。君、僕、そして少し離れて靖とさやかが並んで君と僕の後を付いていく。暗い夜道、ゴールデンウィークのため帰省の始まった車の交通量が多い。その合間を通り抜けて入り組んだ街道を抜けていく。細長い裏道を抜けていくつも並ぶ中華料理店の間にあるのが君の案内してくれたラーメン屋だった。

「よかった、2年も前に来たお店だからもうなくなっちゃったかと思っただ心配しちゃったよ」

「なんや、そんなあやふやな記憶で案内しとったんかいな」

「まあいいじゃないか、こうして見つかったんだし。それより早く入ろう」

「そうだね」

暖簾を掻き分けて中に入っていくと、席は埋まっでいて、ちょうどカウンターに4席だけ空きがあった。昔ながらの老舗といった雰囲気を感じさせる店で、メニューは板で壁に打ち付けられているものと、紙で作られたお品書きだけだ。メニューはラーメン、味噌ラーメン、塩ラーメン、坦々麺、餃子の5品しかない。坦々麺には新と書いてあるので、今までは4品しかなかったということだろう。あまりのシンプルさといまどき食券ではない古めかしさに驚いて僕は声が出なかった。君が鼻歌交じりにメニューを眺めているのを除いては。

「私は決めただけど、みんなは何にする？」

「そんなこと言われても何がええんかわからへんしな」

「コエさんのお勧めは何なの？」

「そうだなあ、私的には塩ラーメンがお勧めなんだけど、みんなそれでもいい？」

「僕はコエさんがそう言うならそれでいいよ」

「おっしや。おじさん、塩ラーメン4つ」

靖は僕の意見を聞くとすぐさま大声で店主と見られるおじさんに注文をした。それに応えるかのような大声で毎度と返事をした店主が注文を受けてからおおよそ十五分後、僕達の目の前にラーメンがやってきた。白いスープにもやしとベーコンとメンマ、そしてバターが乗っている見た目はごくごく普通の塩ラーメンのように見える。匂いからはこうばしいかつおからだしを取ったことがわかるようないい香りを受け取ることができた。

「うまそうやな。ええ香りがぶんぶんするわ」

「懐かしいな。お腹も減ってきたし、食べよっか」

「そうだね。いただきます」

そこで食べた塩ラーメンはどこよりも素朴で身近に居る友達や家族を思い出すような哀愁漂う味を醸し出していた。君は泣きそうになるたび僕の顔を見ては笑顔を作りまた食べては僕の顔を見ることを繰り返していた。堪え切れない気持ちを僕を見ることで沈ませるかのように。僕は僕で君のそんな顔を見てどこかほっとする安堵感を覚えていた。君が無理をしていることはわかっていても僕に何かを求めてくれることが素直に嬉しかったのだ。君の笑顔をもっと見たい。そんな気持ちに君はさせてくれた。それだけで僕は優しい気持ちになれた。今はただそれだけでいい。僕は本心でそう思っていた。これから先距離が近づいてくれることを期待していたことは確かなのだけれど。

ゴールデンウィークが終わると、初夏の香りを一層漂わせてくる。大学の講義もそこに衣替えも行われ、一気に日常へと引き戻される。いわゆる五月病ということなのか、この時期は講義の出席率が激減して、本当にやる気のある人ばかりが大学に集まるといった雰囲気だ。最終的にはテスト直前に誰か毎回出席しているような人にノートをコピーさせてもらって済ますわけである。さもそのときだけ優等生と仲がいいフリをして近づく。優等生はなぜか友達が少ないことが多く、誰かに話しかけられただけで喜ぶことから、頼みやすいと思っっているようだ。

事実、靖は僕に授業を任せて出席重視の授業以外はサボってさやかとデートを繰り返していた。僕の場合はそういう要領のいいことは苦手で、周りにすごいと思われたいがためにまじめを装っていたのがいつの間にか癖になっている。他人に頼られることは嫌いじゃない。たとえ利用されているのだとわかっていても嫌な顔ひとつせず引き受ける。それが正しいことだとこれまで信じてきたのだ。

とはいえパソコンの授業になると、あまりに退屈なのでブログの更新や閲覧をしている。ワードやエクセルといった初心者のための授業なので全て聞かなくてもわかっていく。課題など5分もあれば終わってしまうので、やればいい時間以外は自分のために時間を有効に使いたいのだ。君に講義がないときなど頻繁にメールをくれたりコメントしてくれたりするから面白い。あのゴールデンウィークの日以来僕達の距離は確実に縮まっていた。

前期の授業もほぼ終わり定期試験を除けばあとは夏休みという時期に差し掛かった頃、君からメールが入った。ちょうど昼休みだったので、僕はいつものメンバーから抜け出しケータイの画面を壁越し

に覗く。

『夏休みの計画立てたいから、これから会えない？』

突然の君からの誘いだっただ。僕は慌ててメール画面を閉じてしまったのでもう一度開いて返信に悩んでいると、後ろから肩をとんとんと叩かれたのでむっとした態度で首だけ振り返った。するとこの場にいるはずのない姿がそこにはあった。

「びつくりした？ 大学って結構警備甘いから他校の生徒でも普通に入れちゃうんだよね」

Tシャツにハーフパンツ、短く黒いきれいな髪に深くかぶったキャップといった爽やかな夏のスポーティーなファッションで現れた君は笑顔で僕にそう伝える。僕と君のやり取りが目立ったのか僕の仲間達がいつの間にかその場に集まっていた。

「悟、その子知り合い？ 初めて見る顔だけだ」

「ああ、えっと……詩織さんは」

「友達です。ね、悟君」

「う、うん」

君は僕の腕を掴んで耳元でそっと囁いた。君は僕と君がネットでも知り合ったという事実を知られたくないという気持ちに気を遣って慣れない「悟君」という呼び方で言っていた。智美がじーっとこちらの方を睨み付けるように見ている。

「友達ですか。私はてっきり悟のこと狙ってるのかと」

そう言っただけは君の顔を引きつった笑いで睨み付ける姿はおぞましい光景で、僕は智美に対して怖さを覚えてしまった。君も同じだったようで、僕のわき腹に肘打ちを軽く何度も当てながら僕に何かを訴えていたので、僕は頭をかきながら言った。

「詩織さんが話がしたいって言うからまたね」

僕は君の背中を押して一緒に食堂から出て行った。入り口まで辿り着きみんながいないことを確かめると君はため息をついて「怖かった」と一言を漏らした。

「ごめんね。智美も悪いやつじゃないんだけど」

「あの子、智美ちゃんって言うんだ。多分だけどユクエに気があるね。ユクエと私を見る目が尋常じゃなかったもん」

そう言つて君がぎろつと睨む智美の顔真似をするのに僕はくすつと笑い声を上げた。

「それはわかつてるんだ。はつきりしなきゃいけないとは思つんだけど、言葉が見つからない。どうやったら彼女を傷つかせずに諦めさせることができるのかなってね」

「やっぱりユクエにその気はないんだ」

「言つたる。僕が好きなのは君なんだって」

「でも思つより思われる人と一緒になつたほうが幸せだつて言うでしょ」

「本人を目の前にして意地悪なこと言うんだね、君も」

冗談交じりにとがった口調で言う僕を見て君が笑い出すと、僕もつられるように笑い声を上げた。こうやって冗談を交わしている時間、君と話す時間が僕にとって一番だった。たとえ君にその気がなくても。心の中でいつか僕が君にとっての星になれる日を僕は待っている。誰よりも君にだけ輝きを放つ夜空に浮かぶあの星のように。

「でね、靖君たちが海に行きたいって」

「いいんじゃないかな。夏だし」

「そんなこと言つて、水着に期待してるんでしょ」

「まあそれは僕も男だし期待しないって言つたら嘘になるけど」

外に出てお昼も終わりに近づき人氣のなくなった庭のベンチに座つて、君はバッグからコンビ二で買ってきたであるうおにぎりをほおばる。大学構内は無法地帯で、君の言うように拳動不審な言動さえしなければ誰もがその大学の学生と思つて気にも留めないのが現状だ。深くかぶつたキャップのおかげか顔をはつきりと確認できないのも幸いしているのかもしれない。

「でも本当にコエが大学まで来るなんてびっくりしたよ」

「ごめんごめん。今日うちの大学休講でさ、時間空いちやったら急にユクエの顔見たくなつちやっただ」

真顔でドリンクを飲み、僕の顔を見つめる君に僕は照れるように視線をそらして腕時計を見る。君の僕の顔を下から覗き込むしぐさは相変わらず僕の胸を揺さぶるうとしていてる。

「……授業？」

「うん。これから3限あるから」

「行かないやダメなの？」

「そうだけど、どうして？」

「私、これから行きたいところあるんだけど付き合ってくれないかな？なんて」

「……え？」

君の笑顔に圧倒されて動揺している僕に、君は僕の手を握り立ち上がる。そして無邪気な子どものように曇りひとつない笑みを浮かべてこちらを見た。

「ほら、何してんの。行こう」

「うん」

君は強引に僕の腕を引き歩いていく。その、積極的でぐいぐいと引っ張っていく力が君の魅力でもある。触れ合う君の手はとても温かくて柔らかさを持っていて、温もりを感じられるこの瞬間は幸せに思えた。7月の、梅雨の中休みに覗かせる太陽はとても眩しくて、僕と君にも平等の汗を流させていた。

君に連れ回されること1時間。僕は君のショッピングに付き合われ、荷物持ちを任せられる。まるでコテコテのトレンドイドラマのワンシーンを見ているかのようだった。まさか自分がそんなシチュエーションを体験するだなんて夢にも思っただけじゃなかったけれど、君は狂ったように試着してはお会計、そしてまた次の店へというように僕には一言も告げずに進んでいく。僕と目が合うとにこっと笑顔を振りまくだけだ。

夕日が降り注ぐ頃、君はようやく僕に向かって言葉を投げかける。君は少し上向き加減で後ろ姿の背中から風を感じているようだった。

「ユクエは運命って信じる？」

「運命？何で突然そんなこと……」

「私ね、ときどき思うんだ。神様は本当は雲の上にいるんじゃない。いつも自分自身の中にいるんだって。自分次第で未来は変えられる。最初から決められた運命なんて存在しないんだって。」

「ただどね、人には変えちゃいけない領域っていうのがあって、自分自身ではどうしようもないことだってある。だから自分で乗り越えられない壁を乗り越えるために、誰かの助けが必要なんだ。孤独が怖いから誰か近くに支えてくれる仲間が必要なんだって」

君の頬にはうつすらと涙が流れているように見えた。君は振り返らずに言葉を続ける。

「ハルキがいなくなってから、私はいつも孤独だった。もちろん友達はいたよ。だけど、みんなといっても私は独りだった。誰にも自分の悩みは言えなかった。ううん、言っただけで同情されるのが怖かったのかもしれない。どうせ自分の苦しみなんでわからないなんて思い込んで悲劇のヒロイン気取りでいたんだ。ホントはそんな自分が嫌で自己嫌悪に陥っていたんだけどね。そんなときだったんだ、ライブに行ったのは」

僕は沈黙のまま立ち止まる君の後ろで震える君の背中を見ながら呆然としていた。君の背負っていた想いが痛いほど伝わってきたからこそ、何も言えなかった。言う資格さえないと感じていた。僕も君が彼氏のことと悩んでいたと知って同情の念を少なからず持っていただろうから。人間は残酷だ。知らず知らずのうちに入をこんなにも追い詰め苦しめることができるのに、それに気付かず平然と毎日を歩いているのだから。

「ユクエにメールを送ったのは寂しかったからかもしれない。誰かにこんな自分を知ってもらいたかったのかもしれないね。同情してほしいくないと言いながら矛盾してるんだけどさ。ずるい女だよな。」

……ってか私何こんなことユクエに話してるんだろ。ごめんね、そろそろ帰ろうか？」

そう言つて初めて振り返つて僕の目を見た君に僕はただ、ありがとうと伝えていた。

「嬉しいよ、君が心の内を僕に話してくれて。少なくとも僕と一緒に時にはその孤独は感じないってことだもんね。君の心の声が聞けてよかった。僕が君の乗り越えられる糧になるのなら、いくらでもしてくれればいい。やっぱり僕は君のことが好きだから」

そう言う僕の胸に君は飛び込んできた。僕はとつさのことに荷物を落とすと、そのまま君に抱えるかのように抱き返して君の涙に濡れた顔を上げて見つめながら言う。

「付き合わないか？」

「うん」

突然降り出した雨が僕達を祝福するようにその場で何度も何度もキスをした。張り詰めた緊張も壁を作っていた心も溶けてなくなるように柔らかい唇を重ね合わせた。2度目のキスだったけれど、あの時とは違い温かさに包まれていた。それは君の心に迷いがなくなつたからかもしれない。僕自身も周りの目を気にするどころか君しか視界に映っていないのが不思議に思えたのだ。

あの日以来君は大学が終わるとすぐに僕の大学の正門までやってきた。僕の方が早く終わることもあって「そっちに行こうか」とメルすると、君は決まって終わるまで待っててと言った。僕に会いにくるという行為自体が楽しいらしい。僕と付き合ってから君は元彼の話をしなくなった。僕に気を遣っているのか君が話したくないのか今を大切にしたいのかわからなかったけれど、僕はそれ以上追及することはなかった。今僕が君と付き合っているという事実だけがあればいい。本気でそう思っていたのだ。

夏がやってくる。定期試験が終了すると、僕達大学生は2ヶ月間もの長い休みに入る。梅雨も明けてすっかり広がった青空からは太陽の光が照り付けていた。アブラゼミの鳴き声が響き渡り、辺り一面には太陽に向かって咲き誇るヒマワリが僕達に挨拶を交わしている。

僕達は今、靖の運転で江ノ島の海を目指していた。運転席に靖、助手席にさやかがポッキーを食べながら座り、僕と君は後ろの後部座席で二人でイヤホンをつけながらアイポッドからZEROの曲を聴いている。流れる緩やかな傾斜とカーブ。海が近づいてくると海風が心地よく、夏の暑さも爽快感に変わっていた。

「風が気持ちいいね」

「そうだね」

「しっかしお前らまで付き合うとは思わなかった。まあええ雰囲気やったし、じれったいとは思っててんけどな」

「僕はもつと前から言ってたんだけどね。コエが好きだった」

「私もね、前からユクエのことは気にはなっていたんだ。けどまだ元彼のこと忘れられなくて迷ってた。このままの気持ちでユク

工と付き合っちゃっていいのかなって」

「でも今はその元彼のことを忘れられるくらい悟のことが好きなんやろ？それならそれで十分やんか」

靖の言葉に僕は目を合わせて顔を真っ赤にした。なんだかほっとした。靖の言葉が核心をついているようで。付き合っちゃってこういうことなんだなと今更ながら実感したのかもしれない。君が初めて付き合った人というわけではないけれど、今まではどこか体裁ばかり気にした形だけの付き合いだった。そのときの僕に恋愛感情はなく、ただ誰かに認められるため、他人より優位に立つためだけに人に羨ましがられるような子で僕に好意を抱いている子とだけ付き合い合ってきた。

だけど君に出逢って僕は初めて恋に落ちた。君の声という魅力に引き込まれ、いつもは明るい振る舞いをしながらも繊細な心を持つ君に人間臭さを感じ、いつの間にか君の存在が大きくなっていった。君なしではいられない。恋は理屈ではないってことを君との出会いで僕は初めて感じる事ができたのだ。

海が見えてくると僕達は自然と心がうきうきしてきて、車を止めると荷物を持ってすぐ目の前の海の家に飛び込んでいた。真っ先にここがいいと言い出したのは君だった。君は僕に微笑みかけて僕の腕を掴む。どうも僕は君の押しの強さに弱いみたいだ。有無を言わさない君の笑う顔にうんと返事するしかなかった。

「じゃあ私たちは着替えてくるから後でね」

「うん」

君はさやかの手を引っ張って更衣室に消えていく。僕と靖はあらかじめ着てきた海パン姿にその場で着替えると、2人を待つ間ケータイをいじりながら会話していた。

「しっかしあれやな、お前がコエちゃんと付き合っなんて意外やっ
た」

「そうかな。そんなに釣り合っていないかな、僕たち」

「ちやうちやう、そういう意味やのうてお前が付きあうてた娘って

いつも美人やったり秀才やったり周りから注目を集めて目立ってる娘ばっかやったやんか。そりゃコエちゃんもかわいいとは思ってるけど、むちゃくちゃやってほどもないし、かといって頭がいいわけでもない。ネットで知りおうたからプライベートで目立ってるかどうかもわからへんのやる？そういう言い方悪いけど得体の知れない人は敬遠するタイプやったやんか」

靖の言葉に動揺することもなく、僕は一呼吸置いて靖の目を見て話す。

「僕も最初はそう思ってた。周りが羨ましがるように子と付き合うことが幸せなんだって。美人で成績優秀でスポーツ万能でお金持ちで周りからも慕われていて僕を好きでいてくれる子と付き合いたいってね。僕自身にその子に対して愛情なんて持たなくてもいい。相手が僕の傍にいてくれるだけでいいんだって。だからコエと出会ったときも最初はインターネットからの出会いに抵抗を感じてた。得体の知れない人物だから一定の距離感を持っていなくちゃいけないんだって。

けどそれじゃダメなんだって気付いたんだ。いや、コエが気付かせてくれた。本当に人を好きになるっていうのは理屈じゃなくて心が動くかどうかなんだって。僕は本当に人を好きになるってことを今まで知らずにいたんだなあって思い知らされたよ。なんでコエを好きになったのかって聞かれてもうまくは説明できないんだ。だけどそれでいいんだと思った。僕の心はコエと一緒にいるだけどころなにもドキドキしてるんだからね」

靖はそう語る僕に対して何も言わずに優しい笑顔で僕を見ていた。海の家に流れているBGMと海から聞こえてくる音がどこか心地よくて僕と靖を癒してくれていた。潮風に眠気を誘われる頃、着替えの終わった君とさやかが戻ってきた。純白のビキニ姿で現れた君は懸命に太陽に向かって咲くヒマワリのように輝いている。胸元の開いたスカイブルーのワンピースで靖にアピールしているさやかとは対照的だった。

「どう、似合う?」

「うん、とっても」

「よかった。じゃあ行く」

君は白い歯を覗かせとびっきりの笑顔で僕に合図すると、手をぐいぐいと引つ張って僕を海辺へと引き込んでいく。僕は君の笑った顔が好きだ。それが見たいがために僕は恋人になった。きっとそれだけでいいんだと思う。恋なんてあれこれ損得勘定を重ねちゃダメなのだ。君と一緒にいたい。ただその想いだけで十分なんだよ。きつと君も同じ気持ちなんだと信じているよ。今までもこれからもずっと……。

さんと降り注ぐ太陽の下で肌に赤みが差してくる。水しぶきがかかったときに浮かぶ君の笑顔が見たいがために僕は必死になつて君を追いかけていた。靖はさやかと一緒になつてそんな僕と君の姿を見ながらパラソルの下でくつろいでいる。靖はビール片手に昼間から酔っ払つていてこの後酔いが冷めて運転して帰れるのか心配になるくらいだ。その靖が酔いつぶれて寝てしまい、日は刻一刻と暮れていき、夏の夜も近づいてきた。

「なんや、もう夜か」

「やつと起きた。靖が寝ちゃつて寂しかったんだよ」

「ごめん、さやかちゃん。ところで悟とコエちゃんは?」

「2人ならあそこだよ」

誰もいない海辺に僕と君は座っていた。潮が波で押し返され僕達のお尻をちよつぴり湿らせていく。少し肌寒い風を感じながら水着の上にTシャツを羽織つた僕達はきれいに飾られた星空を眺めていた。

「きれいだね。何だか星を眺めると嫌なことを全部忘れて今を生きてよつて思わせてくれるな」

「そうだね。僕も星のことは詳しくないけど、星を見ると不思議な気持ちになれるんだ。奇跡を信じてみたくなる。こうして好きな人や友達と一緒にいられる奇跡を」

真顔で星空を見つめる僕の横で君はぶつと吹き出し笑いを浮かべた。
「ユクエって意外とロマンチストなんだね。でもそういうの嫌いじゃないかも。こうして出逢えた人と一緒にいられる。それだけで幸せなんだよね」

「うん。世界には六十億って人がいる中で僕達はこの場所に生まれてこの場所に出逢った。それは奇跡を通り越して運命なんだと思う。人って誰もが出会うべくして出逢ってるんじゃないかな。だから僕はその出会いを大切にしたい。これからもずっと」

そう君の目を見つめて語ると君は僕の肩にそつと腕を回しキスをした。ほんのり塩の味をするせりーのように柔らかい感触が僕の思考回路を停止させる。ほんの数秒の間僕は目を開けたまま至近距離に迫った君の顔をまばたきもせずに見つめていた。

「またここに来ようね。今度はユクエと二人つきりできたいな」

「そうだね。約束しよう。今ここで」

僕と君が抱き合ったまま約束を耳元で交わすと、いつの間にか靖とさやかが傍にいて様子を窺っていた。僕達は恥ずかしくなり、とっさに離れるとお互いの目をそらしていた。

「二人のくっさいラブコメも終わったことやし、そろそろ帰ろうや」

「何だよ、ラブコメって」

「ちよつと待って、あれ」

さやかが指を差した先には大量の流れ星がこぼれていた。年に一度見られるかどうかというくらい大きな流星群が僕達を照らし出す。

僕達は願った。この幸せがいつまでも続きますようにと。辛いときも苦しいときも今この瞬間を思い出せれば乗り越えられる。僕達は前を向いて歩いていこう。この日見た流れ星には僕達一人一人の想いが詰め込まれていたのだ。

九月十一日。僕達大学生はまだ夏休みだが、世間はすっかり秋の様相を呈していた。とは言ってもまだまだ残暑は健在で気温は連日三十度を超える日々だ。テレビではアメリカの同時多発テロの映像が繰り返し流されている。それと同時に二十七歳の若さで白血病で亡くなった女優の夏目雅子さんの命日でもあるらしい。今の世の中で終戦記念日以上に重く辛い事実を突きつけられた日。それがこの日なのだ。

二十年前のこの日、君は生まれた。それは僕にとっても大切な一日。僕と靖とさやかは君の誘いで小さな横浜にあるライブハウスの前に来ていた。メールでは誕生日パーティーをやるってことしか記載がなく、僕達は何かわからないまま世間話をして君がやってくるのを待っている。

待ち合わせの時間から十分ほど過ぎたところで君は僕達の前に現れた。黒い革ジャンに肩をさらけ出した迷彩柄のタンクトップ、そしてきれいな足を強調させたショートパンツにグラサンでいつもより派手めの化粧、それに後ろで髪を束ねていて普段では想像できない格好で出てきた君は僕達を驚かせた。僕はてっきりライブハウスの前と言うからインディーズバンドのライブを見に行くのかと思っていたが、どうやら違うようだ。

「ごめん、ちょっと準備に戸惑っちゃって。それじゃ、行こっか」「行くってどこへ？」

「どこへって……。まあ入ればわかるよ」

そう言われて僕達が連れられた場所はライブハウスの中だった。裏口から案内され、明らかに関係者しか入れない場所といった雰囲気だ。君が足を止めたのは『Song of message』と

張り紙の張つてある楽屋だった。インディーズバンドの知り合いのところなのだろうか。君は3回ノックをしてドアを開けた。

「おはよう。今日は友達を連れてきたよ」

「コエちゃん、今日は遅いから心配してたんだよ」

「ごめんごめん、準備に戸惑っちゃってさ」

君に最初に話しかけた男はベースを抱えながら椅子に腰掛けていて、金髪ですらつとした体型だ。上半身は裸で右腕にうつすらと龍をモチーフにしたタトゥーが彫られていた。君は僕らにこのバンドのリダーでベースのアーサーだと紹介された。

「あんなコエちゃん、俺らまだ状況が飲み込めてへんのやけど」

「ごめん、そういえば説明がまだだったよね。ここ、私がやってるバンドの楽屋なんだ。私はこのソングオブメッセージのボーカルのコエで通つてて、今日は私のバースデー記念ライブをこのライブハウスでやることになつてるの」

僕達は思わず驚きの声を上げてしまった。まさか君がインディーズバンドのボーカルをやっていたなんて。君の声にはれた僕だけど、本当に歌手だったなんて初耳だった。君の歌声を知っていたから不思議と違和感はなかったのだけれど、僕は君の事を何も知らなかったということに少し寂しさを覚えていた。

「おい、そろそろリハ始めるぞ。コエもアーサーも早く来いよ」

「リブ、おはよ。わかった、今行く。ユクエたちもリハ見に来るでしょ?」

「もちろん」

ステージ下の観客席に行くときリブと君が呼んでいたひげづらのごつい男が激しいドラムロールをしていた。もう一人、長髪でピンクの髪の大人の女性がいて、どうやら彼女はキーボード担当のようだった。君に聞くと無口で有名なユミというメンバーらしい。

「あれ、バンドやのにギタリストはいないんやな。もしかしてコエちゃんがボーカルと兼用でやるんか?」

靖が不思議そうに尋ねると、君はうつむき加減に急に暗い顔になっ

て泣きそうな表情で小声で口を開いた。

「そのギターリストが私の彼氏だった人なんだ。今は行方不明で何してるのかもわからないんだけどね。ハルキがいなくなっただけから私たちのバンドはギターなしでやるうってことになったの」

「ごめん、俺そんなつもりやのうて……」

靖があたふたしてるところで僕は何とかしなきゃと頭より先に体が動いていた。君を抱きしめて囁く。

「大丈夫だよ。僕がコエの支えになるから」

「ありがとう」

君は暗く曇った表情を覆してくつたくない笑顔で下から覗き込むように僕を見つめた。その様子を見ていたバンドメンバーから一斉に拍手が起こった。

「見た目よりかっこいい彼じゃないか。コエちゃんもこういうやつは大切にしなきゃだめだぜ。ユクエ君って言ったっけ？これからもコエちゃんをよろしくな」

「はい。ありがとうございます、アーサーさん」

僕とアーサーは熱い友情の握手を交わす。アーサーの手は肉厚でとても温かかった。アーサーのみならずメンバーも彼がいなくなっただけの君の事を心配していたに違いない。そんな想いが初対面の僕にもひしひしと伝わってきたのだ。

「それじゃリハ始めよっか。1曲目は『Love Again』を通してやるよ」

「了解」

君の掛け声でリブのドラムから始まる激しいロックナンバーが鳴り響いた。そこから3曲ほど通して行われたリハで僕は改めて君の歌声のとりこになっていた。透き通った優しく甘い声。君と出逢ったそのときから僕は君の声が好きだった。それが今多くの人の前で披露されようとしている。なんだか僕の特別を奪われる寂しさと多くの人に君の声のよさを共感してもらえる喜びが入り混じって複雑な気分になった。

後1時間で開場ですというスタッフの呼び出しがかかると、メンバーは演奏をやめ楽屋に戻っていく。体の汗をタオルで拭いながら君はポケットから数枚のこのライブのチケットであるうものを取り出して僕の手を握りながら渡した。

「今日は私たちにとって初めてのワンマンライブなんだ。1時間半つていう短いライブなんだけど、一緒に楽しんで誕生日の最高の思い出にしようね。終わったら楽屋にも寄ってってね。待ってるから」
「うん」

「それじゃ私は戻るから」

君と別れて外に出ると整列が始まっていて、多くのファンが今か今かと待ちわびていた。君に渡されたチケットは関係者用のものなのか整理番号が一桁になっており、僕は並び始めてまもなく番号が呼ばれた。いつもホールやアリーナクラスのライブにしか行ったことのない僕はライブハウス慣れしている靖に先導されてさやかと一緒に足を踏み入れる。チケットの半券と交換でドリンクの引換券が渡され、僕達はロッカーに荷物を入れてからステージへと進んでいった。中にはドリンクの交換所があつて僕とさやかはスポーツドリンク、靖はビールと引き換えてもらつてから最前列のセンターの手すりに場所を陣取つた。

すでに熱狂的ファンのグループが隣にいて人が入ってくるたびに周りは埋め尽くされていく。

「この場所はな、めっちゃくちや近くで見えるんやけど、ぎゅうぎゅう詰めでもみくちやにされるから覚悟しておいたほうがええで」

靖のそんな言葉に躊躇しながらもなんとなく僕はこの場所で君の想いを受け止めなきゃいけないような気になってさやかが少し後ろに下がっているのを見てもその場を離れようとはしなかった。こんな小さなライブハウスは初めてだけど、Zeppや野外ライブなら経験したことがある。僕には大丈夫だという自信があつた。

開演の十八時半を5分ほど過ぎたころだろうか。開演を知らせるアナウンスとSEとともに君を含めた4人のメンバーがステージ上

に登場してきた。会場からはメンバーの名前を叫ぶファンの声が飛び交う。まるで雪崩のように押し寄せるファンの波に負けずに手すりにしがみつきなながらポジションを保っている、君がバンドメンバーに目で合図しそのままこの日のライブは始まった。

リハーサルで聴いた3曲が終わったところで最初のMCが入る。君は水を一口飲むとマイクを持ってスタンドに足を引っ掛けた。

「今日はソングオブメッセーじ初のワンマンライブへようこそ。今日は思う存分楽しんでいってね。楽しまんやつは罰ゲームだぞ。行けるか、お前ら。次の曲行くよ、『夢よ、永遠に』」

いつもの君からは想像もできないくらい迫力のあるボイスで口を尖らせながら叫ぶ姿に圧倒させられ、僕は心臓の高鳴りを抑えきれずに興奮していた。また次の曲が始まる。僕の好きな君の声は頭だけではなく、心にまで浸透し僕の体を包み込むかのような錯覚に陥った。今までたくさんライブに行っていたけれど、こんな感覚に襲われたのは初めてだった。君の感情が直接伝わってくる。ライブハウスという小さな空間だからかもしれない。君という個人のことを知っているからかもしれない。君が翼の生えたエンジェルかと思うような幻覚に襲われていたのだ。君の声に涙し、熱く燃え盛る興奮を抑えきれずに僕はいつの間にか周りを気にせず言葉にならない声を叫んでいた。

一曲、また一曲とライブが中盤から終盤にかけてヒートアップしていく。僕は周りの熱狂的なファンによってもみくちゃにされながらこの瞬間を楽しんで心からの笑顔と汗を見せていた。息もつかせぬアップテンポな曲の連続の後のブレイクに入ると、君はちらっと僕に視線を投げかけたように見えた。舞台から消えてほかのメンバーがトークを展開している途中で胸元をちらりと覗かせたブルーのドレスをまとった衣装にチェンジした君が再び現れる。マイクを取った君はこの日最高の笑みを浮かべながらステージ中央に立つ。

「みんな、今日は何の日か知ってる？九月十一日、そうアメリカの同時多発テロが起こった日だよ。もう二度とあんなことを起こし

ちやいけない。だけど私にとってはもうひとつ大事な日でもあつてさ。私、コエは今日で二十歳のバースデーを迎えました」

ピースサインをしながらにっこりと笑う君にファンからおめでとうの声が飛んでくる。するとそこへアーサーとリブがろうそくのついたケーキを乗せた台車を運んできた。

「いきなりだから何かと思つたよ。ありがとう」

そう言つてろうそくに息を吹きかけて消す君の顔がなぜかおかしくて僕はくすつと笑つてしまつていた。それに気付いたのか君の凍てつく視線を感じ、僕はごまかすように拍手をしていた。ケーキが下げられると再びマイクを持った君は僕に向かって左の人差し指を指していた。

「今日はみんなに紹介したい人がいます。その人は私にとって今一番大切な人。私は彼によつて救われました。彼とはZEROのライブで初めて会つてそれからネット上でやりとりをして、次第に会うようになって……。ハルキがいなくなつてからこんな気持ちがあまた起こるなんて思いもしませんでした。今では彼なしでは生きていけないつてくらい好きになっています。紹介します、ユクエ」

君がステージ上で僕の紹介をすると、君は僕の手を取つてステージ上へと促す。靖とさやかにその後押しされ壇上上がった景色は僕が想像する以上に大きくて自分がちつぽけに見えた。まさかこうやつてこの場所に立つことになるなんて思つても見なかつたから。君は僕に耳打ちして伝える。

「次の曲で最後なんだけど、この曲は私の誕生日記念にユクエと一緒に歌いたんだ」

「でも僕は曲を知らないんだよ」

「大丈夫。次の曲は私たちの曲じゃなくてコピーだから。ユクエも知つてる曲だよ。イントロ聞けばわかるんじゃないかな？」

君はそう言つと僕の肩を掴み背中を押しながら、マイクを持って中央に立つた。

「今日の日の最後に二十歳になつた記念に彼と一緒に歌いたいと思

います。曲は私とユクエが共通で大好きなバンド・ZEROからのコピーです。わかる人は一緒に歌ってください」

君の合図でイントロが流れ出した。僕は君の言う通りこの曲が何の曲だかイントロに入った瞬間に理解できていた。君と初めて一緒に歌った大切な曲。こうやってライブハウスで歌うことが初めてでも練習をしていなくても僕はマイクを通して楽しみながら歌っていた。君も僕も、そしてここにいるファン全員が一体になって笑顔で手を振りながら歌う姿が印象的だった。

ZEROの中でもとっても想いの詰まったバラードナンバー『また会おうね』。君とこうして再び歌うことができ僕は嬉しかった。出会ったばかりの君と今の君。そして君と出会う前の僕と今の僕。あれからどう成長し変わってきただろうか。お互いの短所を長所で補い、次のステップへ進むことができただろうか。次にまた会うときちよつとした変化は感じられるだろうか。そうやってお互いがまた逢いたいと思うことで、次の出会いが訪れる。次に会う日があることに感謝しなければならぬ。僕は君と出会うことで、今この場所に立っていることで教えられた気がするよ。

「ありがとうございます」

曲が終わると僕とメンバー全員が手をつなぎ礼をすると、君が枯れ気味の声でマイクを通さずにそう叫んだ。今も君の歌声が僕の脳裏に焼きついている。あつという間の1時間半だった。僕は君やメンバーと一緒にステージを後にした。君はステージのファンに対して手を振ると投げキッスをして歓声を上げさせていた。前列に居るファンと握手を交わした後に楽屋に戻ってきた君はぐったりと疲れきった表情で椅子に腰掛けている。

「ユクエ、今日はありがとね。一緒に歌ってまでくれちゃって」

「ううん、とっても楽しかったよ。なんかコエの誕生日なのにこっちがプレゼントをもらっちゃったみたいだね」

「夢だったんだ。二十歳の誕生日にこうやって好きな人と一緒にステージに立つのが。今日は本当に気持ちよかった。プロになりたい」

本気でそう思えたよ」

「僕もコエがバンドやってるって知ってちょっとびっくりしたけど、コエならなれるよ。少なくとも僕は君を好きになる前から君の声のファンだったんだから」

「ほんと？嬉しいなあ」

君はまるで幼い少女に戻ったかのようにくっつくたかない笑みと白い歯を浮かべていた。そこへ観客として一緒に来た靖とさやかが楽屋に入ってくる。

「詩織、お疲れ。今日はかつこよかったよ。またライブやるときは誘ってね」

「ありがとう」

「ホンマにカツコよかったで。ほんじゃ俺とさやかは帰るから悟、コエちゃんをよろしく頼むで」

「ちよつと」

靖とさやかはそれだけ告げると怪しい笑みを浮かべてバイバイと楽屋から出て行ってしまった。僕と君は数秒間お互いを見つめたまま動けずにいた。

「行っちゃったね。ホント、二人とも勝手なんだから。そうだユクエ、これから一緒にみんなと打ち上げパーティーやらない？」

「いや、今日くらいは二人で過ごしちゃいなよ。俺らは先に帰るか」

アーサーはそう言ってリブとユミを連れて出て行ってしまった。誰もいなくなつて僕と君の二人っきりの空間はとても重くてお互いの目を見られないくらい久しぶりに緊張を感じてしまっていた。それでも勇気を振り絞って君の汗まみれになった腕に触れると、君はびくつと反応して顔を赤らめた。

「ごめん。ちよつと着替えてくるね」

「うん」

十分後に戻ってきた君はTシャツにカーデガンを羽織って、ピンのミニスカート姿で登場した。このライブハウスにある衣装の中

から普段着っぽいものを選んできたと君は言う。君は下から僕の顔を覗き込むように行こうと声をかけた。

「……手、つないでもいい？」

「もちろん」

君が差し伸べた手を僕はぎゅっと握り締めた。柔らかくすべすべながらライブの後のため汗でべとつとした君の手。今思えばこうして手をつないで君と歩くのは初めてだった。なんだか君はそういうのを嫌がりそうな気がしたから僕は躊躇っていたのかもしれない。君と一緒にいるとき、僕は君の後ろを歩くことのほうが多かった。と言うより君と二人つきりになること自体が珍しいことだった。いつも靖やさやかがいたからちゃんとした恋人関係をあまりしてこなかった気もする。だから今は幸せの喜びとともに最高潮の緊張も感じていた。

ライブハウスの外に出て歩き始めた僕らは中華街にあるラーメン屋で足を止めた。前に行く君は店の入り口を指差して振り返り僕の顔を覗き込むように見つめる。

「ここに入ろう。一緒に飲もうよ、ね？」

「僕はあんまり飲めないんだけど、大丈夫かな？」

「そんなこと気にしなくていいよ。ほら、行こ」

店を見つけると君はいつもの無邪気な女の子に戻ったように明るく僕に微笑みかけていた。暖簾をくぐって入ったお店は会社帰りのサラリーマンでいっぱい、僕達の案内された席は奥の隅っこに追いやられた場所だった。周りから起こるタバコの煙が少し気になりながらも僕は君が嬉しそうにメニューを選んでいる様子を眺めている。「じゃあ私はとんこつラーメンと生中1本。ユクエはどうするの？ たしか辛いのが好きだったよね」

「そうだね。じゃあ僕は坦々麺と生中1本で」

メニューを注文すると君はいつも以上にこにこしながら僕の顔を眺めていた。注文したビールが届くと飲みながら君はポケットから何かを取り出す。これと言って渡されたのはブルーのティディベ

アのお腹のところKoeと君のサインが入った携帯ストラップだった。もうひとつのピンクのティディベアには何も書かれていない。「この間友達と旅行に行ったときに買ったんだ。2人の愛の印にペアで。ひとつは私のサインが入ったブルーでこれはユクエに持ってほしいの。それでこっちのピンクにはユクエがサイン書いてほしいんだ。私が持つために」

「僕たちの愛の印か。なんだか恥ずかしいね。だけどなんかわかるよ。ありがとう」

君の満面の笑みがかわいくて動揺しながらYukueとサインを入れた。2人のラーメンも届いて食べながら君と会話する時間、僕は時間が止まってほしいと思っていた。君は意外とがさつで豪快に食べるもんだから、時折ラーメンの汁がテーブルに飛んでいてそんなどうでもいいことが僕らにはおかしかった。まるでさっきまでライブハウスのステージで歌っていた君とは別人のように君は僕に対して素の自分をさらけ出していた。僕を含め多くの人が苦手とするありのままの自分を見せるということ。それができる君はとても魅力的で僕は一番君のそういうところに惹かれていったのかもしれない。

お酒の弱い僕は1杯でくらくらしたのでコーラに切り替えたが、君はその間も平気な顔をしてかわりを注文していた。君がこんなに飲むだなんて想像していなかったから驚いたが、僕は君からこぼれる愚痴の数々を聞き役になって一緒に餃子をつまみながら頷いていた。閉店時間まで飲み続けているとさすがに気持ち悪くなったのか、君はトイレに何度も駆け込んだ。

ふらふらになってトイレから戻ってきた君の背中をさすりながら僕はお勘定を済ませ店を出る。僕はふらふらになっている君をおんぶしながら道を歩き始めた。

「ごめんね。酔っ払うといつもこうなんだ。幻滅した？」

「そんなことないよ。コエはコエだから僕はどんなことを君がしたとしても君を受け入れる。もちろん僕だって君が間違った方向に行こうとするなら止めるけどね。そこまで受け入れるのは優しさとは

違うと思ってるから」

「ありがと。やっぱりユクエは優しいね」

君はそう言っただけで僕の首筋に軽くキスをした。いつも強がり引張ったりしている君から考えると、しおらしくしている姿はとても新鮮だった。

「今日はふらふらで帰れそうもないからタクシー乗ろうか？この辺の地理詳しくないけど、駅まで行けば拾えるだろうし」

「そうだな、今日は帰りたくないかも」

「……帰りたくないって？」

君は僕の背中に体を密着させて顔を真っ赤にさせていた。心臓の鼓動がお互い高鳴っていくのを感じる。君の温もりがアルコールの匂いを残していても甘く心地よいものを運んでくれていた。どこをどう歩いたのか、今僕達の目の前にはラブホテルの看板がでんと構えていたのだ。

「入ろうよ、ユクエ。ユクエだって初めてじゃないんでしょ？」

「それはそうだけど、心の準備ってものが」

「もう。そうやって頭で考えようとするのがユクエの悪い癖だよ。

私に恥をかかせたくはないんでしょ？」

「そりゃそうだけどさ」

君は突然僕の背中から降りて僕の目の前に回りこみ下から覗き込むように僕の顔に近づく。君はキラキラした瞳で僕を見つめていた。僕の背中に押し付けたためかほだけた君の服が色っぽさを強調させている。

「わかった、一緒にいよう」

半ば強引に気持ち奮い立たせて僕は君の手を優しく握り、ホテルの入り口に向かって歩き出した。フロントで受付を済ませると躊躇しまいと君の手を引いて早足で部屋へと入っていった。僕はベッドの上に倒れこみ、ようやく落ち着いてため息をついた。

「まさかホントに入っちゃうなんてね」

「なんだよ、コエが入ろうって言ったんだろ」

「うん。でもなんか二十歳になった途端に2人で飲んでそのままホテルだなんてすごいことだよな」

君はくすくす笑いながらベッドの上に座り込んで僕の傍に寄ってくる。酔いが醒めたのか、アルコールの強烈な匂いは鳴りを潜めていた。

「僕は君が嫌だっけ言うならやめてもいいんだよ。もう帰れないだろうからここで寝泊りはするしかないけど」

「そんなこと言っちゃダメだよ。頭ではそう言っても体は正直なんだから」

そう言っただけで君は僕の下半身を覗き込むように見ている。笑っていた。

シャワーを交代で浴び終わって出てきたときには君はバスローブ一枚の姿でベッドに座っていた。僕達はお互いの温もりを感じながら求め合った。お互いの愛の深さを確かめ合うように優しくしながらも心のままに従って。これから何度求め合っても初めてのときを忘れないようにしよう。この瞬間に感じた愛するという気持ちを。

僕達はそう誓いを立てて疲れきった体が欲するままに目を閉じた。

あの日の出来事も思い出に変わるようにあつという間に夏休みは終わり、後期の大学の授業が始まった。残暑と呼ばれる日も幻だったかのようにあたりはすっかり秋の化粧をはじめ、紅葉した街並みも次第に葉を落として北風を運び込む。一度咲かせた花はやがて枯れる。僕はこの季節が一番嫌いだった。何か嫌なことが起こるような恐怖に襲われて、憂鬱な気分になるのだ。

「ねえユクエ、聞いている？」

「……ごめん、何だっけ？」

君は肩までだった髪の毛が背中の中中央辺りまで伸びていた。十二月に入って大学の外のベンチはとても寒くて、君はニット帽にセーターとコートを羽織って少し震えながら僕に会いに来てくれる。僕はカイロ片手に君と数分交代で譲り合いながら君と会うたびにドキドキするのを楽しんでいた。

「だからクリスマスの話だよ。今年が付き合って初めてのクリスマスでしょ」

「そうだね。……コエのアパートでやるなんてどうかな？」

「そういえばユクエはまだ私のアパート来たことなかったよね？」

「うん。別に隠してるわけじゃないんだけど、意外と僕たち知らないことが多い気がするよ」

「わかった。クリスマスイブは私のアパートでお祝いしよう。それでお互いの知らないこと言い合いつこしようね」

君は嬉しそうに笑みを浮かべながら立ち上がり、僕の手をぎゅっと握った。冬の温度で冷たくなっていた君の手は僕の温もりを奪い取るようにこすり合わせていた。

十二月二十四日。クリスマスイブのこの日は街中がイルミネーションで彩られ、恋人や親子が仲睦まじい様子で微笑みが絶えることなく続いている。この寒空の下でもこの日一日だけは温かい気持ちでいられる日なのだ。

君のアパートがあるという水道橋駅で待ち合わせをしていると、そんな恋人を待つ若い男がケータイを何度も開け閉めしながら来るのを待っている様子が目に付く。駅の周辺には出版社や大学、東京ドームにWINSなどといった大きな建物が並びイベントやらライブやらで賑わいを見せていた。東京ドームには大きなツリーと電飾で彩られ、でっかく誰もが知る日本を代表するビッグバンドの名前が刻まれた垂れ幕がかかっている。待ち合わせ時間まで時間があつたのでそういつたクリスマススの雰囲気味わいながら周囲を歩き回っているதாகさんの発見があつて楽しかった。

待ち合わせ時間から十分を過ぎたところで君は到着した。赤と白の毛糸の帽子に胸元の開いた赤のワンピースと赤いコート、白いブーツといった格好はどこかサンタを思わせて僕はドキツとした。僕の茶色のセーターに黒のジャケットとジーンズという姿とは対照的だ。

「ごめんお待たせ。ちよつと着替えに時間かかつちゃつて。どう、似合う？ちよつとサンタさんのコスプレチックにしてみたんだけど、ほら、ドームにたくさんコスプレしてる人いるからそんなに目立たないかなと思つて思い切つちやいました」

「うん、とつても似合つてるよ」

君は僕にそう言われると、顔を真っ赤にして僕の胸を押しして照れ隠しをした。いつも堂々と構えている君が照れているときのギャップが僕はたまらなく好きだった。

「それじゃとりあえずどこかで話してからアパートに行こうか。ショッピングも行きたいし」

「そうだね」

君に連れ回されるまま予約していたケーキやお寿司を取りに行つ

たり君がご馳走してくれる手料理の材料を買いに行ったりとまるで主婦に買い物に付き合わされている夫のような妙な感覚に襲われて、僕は嬉しい反面複雑な気分になった。荷物持ちでくたくたになった僕を気遣ってか、君が立ち寄ったのはファーストフード店に挟まれた小さな喫茶店だった。

「こんにちは」

中に入って君が元気よく笑顔で挨拶をすると、カウンターにいた三十代前半くらいと思われる男性店員が僕達の前に来て立ち止まった。「春川さんじゃん、こんにちは。あれ、今日はバイトなかったよね？」

「今日はバイトじゃないんだ。彼氏と一緒に私んここでパーティーしようってことになって」

「そっか、今日はクリスマススイブだもんね。そういうことならここで食べてきなよ。安くするからさ」

「最初っからそのつもりですよ。……席、空いてるよね？」

「今ちようどお昼のピークが過ぎたところだから。クリスマススイブで日曜だから普段よりは混んでるけど……ほらあの奥の席がちようど空いてるよ」

「ありがと」

僕達は男性店員に導かれて、1つだけ空いている2人用のテーブルに座った。男性店員はメニューを渡すと、後からやってきた客を見つけてまたカウンターに戻っていく。

「びっくりした？私、ここでバイトしてるんだ。ユクエがこの間私たちが知らないこと多いって言ってたから知ってもらいたいと思って」「そうなんだ。ちよっぴりここで働いてるユクエの姿も見てみたいなっと思ってたよ」

「変な想像しないでよ。恥ずかしいから。それより食べよ。ここはね、パスタがすっごくおいしいんだよ。私はカルボナーラとホットコーヒーかな。ユクエはどうする？」

「じゃあペペロンチーノとレモンティーで」

お腹いっぱいになって元気を取り戻すと、僕達は再び歩き始めた。君は東京ドームに向かう横断歩道を渡り終わると何かを思い出したように腕時計を見て立ち止まった。

「やばっ。もう二時五十分じゃん。もう発走しちゃっ」

「どうしたの？」

「ごめんユクエ、アパート行く前にもう1箇所寄ってっいいい？」

「別に構わないけど」

そう言っただけで君が向かった場所は場外馬券売り場、いわゆるWINSだった。東京ドームに隣接したJRAと書かれたその施設には多くの競馬ファンでいっぱいでもビッグアーティストのライブがあるんじゃないかってくらい混雑していた。こんな光景をライブ以外で見るのは初めてで驚きのあまり僕は数秒間絶句してしまった。

「今日って何かあるの？僕は競馬やらないからわからないんだけど。コエが競馬好きだなんて意外だったよ」

「たまにしかやらないんだけどね。今日は一年で一番大きなレース。有馬記念があるんだ。ちょっと私は馬券買ってくるんだけど、ユクエも見に来る？」

僕は君が好きだということに興味があったので、人ごみを掻き分け突き進む君に付いていった。君に待たされている間、僕は設置されている大画面で初めて見る光景に目を奪われた。馬がほかの馬をこぼす抜きしていく姿、激しいデッドヒート、あつという間に入れ替わる息もつかせぬ展開……。競馬という世界で戦っている競走馬のガチンコ勝負から得られる興奮は好きなアーティストから受ける衝撃とも似ていて、競馬ファンがこれを見たいと集まってくるのもわかる気がした。

「お待たせ。混んで締め切りギリギリだったよ。さ、もうすぐレースだから一緒に応援しよ」

十分ほどして戻ってきた君は笑顔で荷物を持って手が離せない僕の

腕を掴んで、競馬ファンが集まる画面の前方に掻き分けながら入っていく。画面には『有馬記念』とロゴが表示され、出走馬の名前とともに自衛隊の生演奏によるファンファーレが鳴り響く。ゲートに入れられてぼーとしてる馬、気負いすぎている馬、いい具合に気合が乗って走りたがっている馬……。一頭一頭見ているだけでも個性があつて、動物をひとつのカテゴリとして大きな枠でしか見てこなかった自分の価値観を反省させられた。

ゲートが開き疾駆するサラブレッドを見ていると、どこか自分と重ねてしまう。ゴールへ向かい一直線に突き進む。だけど最初からそこだけに向かつて突っ走る人もいれば、ゆっくりだけど結果的に最後にはゴールに辿り着く人もいる。途中で挫折して競走を中止する人もいれば、最初から競走するのを嫌がつて逃げ出す人もいる。まるで人生の縮図を見せられているみたいで、これから大学を卒業してそれぞれの進路を歩んでいく僕達には胸の痛い話だった。

先頭の馬がゴールすると、君は僕の腕を掴んでぴよんぴよん跳ねながら絶叫していた。興奮した口ぶりで君の口からは白い歯がこぼれていた。

「やった、当たったよ。見てこれ。二百倍くらいつくんだよ」
君が僕の手元に置いた馬券には「中山9R 有馬記念(G?) 馬単8 2 1000円」と書いてあった。画面を見ると確かに8番から2番の順にゴールしていた。結果が確定すると君はすぐさま窓口で払い戻しを行い、慎重にスリに会わないようにこっそりと僕の元に戻ってきた。

「このお金で今度どこか一緒に旅行行こうね」
君がにっこり笑う顔がとてもいとおしくて、写真に収めたいくらいだった。周りの中年の人達の吸うタバコの煙に覆されてもなお、曇ることのない喜びの表情が僕は好きだ。

WINSを後にして君のアパートまで向かい始める頃には辺りはすっかり暮れていて、夜空が顔を覗かせていた。うつすら見える星

は輝いていて、僕達に自然の光を与えてくれる。東京ドームの裏に回り、ファミレスやコンビニを越えて渡った先に君の住む2階建てのアパートがあった。

「2階の左端の部屋が私の住んでるとこなんだ」

「へえ、僕は成城に通ってるって言っただからもつとすごいところに住んでるのかと思っただよ」

「何それ。成城に通ってるからってみんながみんなお金持ちってわけじゃないんだよ。もちろんホントのお金持ちって子もいるけど。たしかさやかのうちは豪邸じゃなかったかな？」

「そうなんだ。でも僕はこういう素朴なとこの方が身近に感じるから好きかな」

「また、調子いいこと言っちゃって」

君はからかいながら階段を上がって鍵を開けて部屋のドアを開いた。今日はクリスマススイブということでほかの住人はみんな出かけていて留守らしい。管理人さんは夜中に帰って来るそうで、実質このアパートには僕と君しかない。

君の部屋は思いのほか片付けられていて、女の子らしくぬいぐるみやインテリアで彩られていた。その中に音楽の練習用にギターやキーボードも隅に置いてある。本棚は音楽関係の本以外はマンガ本と恋愛小説ばかりで埋め尽くされている。テレビの下の棚にはDVDプレイヤーとゲーム機、それからアクションものを中心としたゲームソフトがきれいに陳列されていた。

「きれいに片付いてるんだね。あ、これ」

僕はテレビの上に置かれた写真立てを指差した。そこにはお台場で撮った僕達2人の初めての写真が収められていた。

「恥ずかしいでしょ。でも記念だから飾るところかなと思って。2人で初めて撮った思い出の写真だから。でもこのときのユクエ、ホントに面白かったよね」

「変なこと思ひ出さないでよ」

僕と君はお台場で撮った1枚の写真を見て合わせるように声を上げ

て笑っていた。君は笑いをこらえながら僕の顔を下から覗き込むように見上げる。

「でもさ、あの頃と比べて今のユクエ、うまく笑えるようになったよね。なんか、かつこいいよ」

「それも全部君のおかげだよ。君がいたから僕は笑顔でいられる。」

あの頃よりも素直な気持ちさをさらけ出せるようになったと思う」

「ホント、ユクエってくさい台詞好きだよ」

「あのな、僕は真剣にそう思ってるんだよ」

君はまた思い出したようにお腹を抱えて笑った。

「でも私も同じだよ。ユクエがいるから今生きてる時間を素晴らし
いって感じる事ができる。ユクエに出会わなかったら私、どうな
ってたんだろうってときどき考えるんだ」

「そうだね。人と人の巡り合いつて偶然に偶然が重なって出会うべ
くして出会ったと思う。出会いも別れも何一つ無駄なものなんて
ないんだよ」

僕と君は顔をつき合わせて微笑んでいた。君がいるから僕がいるこ
と、そして僕がいるから君がいることをかみ締めるように。

「それじゃそろそろ料理作るからユクエは待ってて」

僕が食べた君の初めての手料理はどこか濃厚で優しい味がした。

どこかの高級レストランで味わうのとは違う人の心がこもったシチュウだ。まずいわけがなかった。食事が終わりZEROのクリスマススライブのDVDを2人で見ていると、僕達は世界に入り込み二人で騒いでいた。DVDを見終わるとクリスマススィブも残り三十分となっていることに気付き、僕はバッグから箱を取り出し君に手渡しした。

「何これ。……クリスマスプレゼント？開けてみていい」

「うん。ちっぽけなものなんだけど」

君がリボンをほどいて箱を開けるとそこには銀色のネックレスが入っていた。三日月をかたどったデザインが印象的で僕が君のために選んだものだった。君は早速首につけてくるりと僕の目の前で一回転する。

「似合う？」

「うん、とっても」

「ありがとう。これからもずっと一緒にいようね」

「もちろん」

君は僕に微笑みかけて、忘れていたことを思い出すように言葉を発した。

「そうだ。ブログにユクエに向けてメッセージ書いたから一人になったときに読んでね。今読まれると恥ずかしいから」

「わかった。どんなこと書いてあるか楽しみにしてるよ」

僕がそう首に寄りかかるように抱きついたとき、呼び出しブザーが鳴ったのに気付き僕と君は体を離れた。

「今頃なんだろうね？今日は誰も呼んでないんだけど」

「コエはここにいて。僕が出てくるから」

「……うん」

僕がそつと近づいてドアの前に立つと、ドンドンとドアを叩く音がして若い男の声が響いた。

「詩織、俺だ。開けてくれ」

「誰ですか？春川さんのお知り合いの方ですか？」

そう僕が語りかけるように言うとまもなく君がドアに向かって走りこんできてドアを開けた。そのドアの向こうに立っていたのは黒いサングラスをかけたおっ立てた茶髪と革ジャンにローライズパンツのよく似合う長身で細身の若い男だった。

「……晴樹」

君はぼそつとおそらくその男の名前であろう言葉を呟いた。驚きの中に喜びのような表情が入り混じっていて、そんな君の顔を見ているとなぜか胸騒ぎがしてくる。晴樹と呼ばれたその男はサングラスを外し、君に手を差し伸べて握手を交わす。

「久しぶりだな。元気だったか？」

「……元気だったかって。どんだけ心配かければ気が済むの？晴樹がない間どれだけ不安だったか」

「なんだよ、勝手にいなくなっただけで怒ってんのか？そりゃ悪いとは思ってるよ。俺は昔の女のとこに転がり込んでしまったんだからな。だけど、心配すんな。もう縁は切ってきたから。俺がここに帰ってきたのは詩織、もう一度お前とやり直したいからなんだ。どうしても詩織のことが頭を離れなかった。元カノと一緒にいたときもずっと。」

俺さ、今新しくバンド組んでんだ。一緒にやらないか？俺はお前じやなきやダメなんだ。頼む、戻ってきてくれ」

君は一瞬迷うそぶりを見せたが、すぐに手を振りほどき右手でピントを彼に浴びせていた。そして僕の腕に手をかけて寄りかかる。

「馬鹿にしないで。私はずっと不安だった。晴樹がいなくなっただけでさっさと晴樹のことを考えては泣いていた。でもね、今の彼はそん

な私の心を救ってくれたの。今本当に私に必要な人は晴樹じゃない、ユクエなんだって。だからもうあなたのところに戻る気はない。さようなら」

君の体は少し震えていて、この言葉を言うのにどれだけ勇気を奮い立たせたのか想像もつかないほどだった。僕はそんな君の手をしつかりと握って彼に言葉を放つ。

「今の話を聞いててなんとなく飲み込めたよ。君が突然コエの前から姿を消した元彼のギターリストなんだよね。僕が言うのはおこがましいのかもしれないけど、何か独りよがりって気がする。ほかの人のところに行つてまだ忘れられないから元の人のところに戻りたい。相手が納得して戻りたいって言うなら別なんだろうけど、コエは僕を選ぶって言うてる。だから帰ってくれないかな。もう君とコエの関係は終わつたんだ」

晴樹は僕と君の話を聞いてにやつと笑っていた。まるで人が変わったように眉間にしわが寄って怖い表情になっている。

「なんだよ、俺のこと何も知らないくせに好き勝手言いやがって。目を覚ませよ、詩織。お前、こんなやつのがいいんだ？顔に特徴がない、見るからに貧弱そう、どこにでもいるような普通の男に何が出来るって言うんだ。俺のどこにこいつより劣るところがある？言ってみるよ」

「晴樹のそういうところが昔から嫌だった。自分が気に入らないところがあるとすぐそうやって小馬鹿にした態度をとるところが。なんで気付かなかつたんだろうね。離れることで美化されすぎていたのかもしれない。ユクエには少なくとも晴樹にはない思いやりを持っている。私はそれだけで十分だと思ってるの」

晴樹は僕を鋭い目で睨みまるで悪魔のような笑顔で一步こちらに近づいてきた。

「壊してやるよ。そんなちっばけな心だけで繋がってる愛なんて儂いものだってことを教えるためにな」

晴樹はそう暴言を吐くと、僕の手を振りほどき君の体を抱きかかえ

て唇を奪っていた。嫌がり顔を背けようとする君を逃すまいと押さえつけながら。晴樹は僕を蔑んだ目で睨んでいる。

「わかったか。愛なんてこんなもんなんだよ。簡単に奪えるし壊すこともできる。心だけで繋がっていてもどうすることもできないことだってあるんだよ」

「やめて。いい加減にしてよ。ホント、自分勝手にもほどがあるよ。いきなり帰ってきてヨリを戻したいから力尽くで奪おうとするなんて。あなたがこんなだったなんて知っていたら私はあなたを好きになんてならなかった」

「何だよ、一度は好きになった相手に対してそれはないんじゃないか。恋愛なんでもともと自分勝手なもんなんだよ。どこに理屈で好きになるやつがいる？どこに他人の意見に流されて行動するやつがいる？恋したら誰だって自分に好意を抱いてもらうためにアピールするだろ。それは自分勝手以外の何者でもないじゃないか」

僕は晴樹が叫んで油断している隙に晴樹の後ろに回りこみ、君の体を振りほどいて投げ飛ばした。彼のほうが体格もよく力もあつたせいか、僕も一緒になだれ込むように倒れこんだ。

「なんだよ、ちゃんとわかってんじゃないか。恋は理屈じゃないってこと。あんた言ったよね？僕はあんたより劣ってるのにどうして僕のほうを選ぶのかって。理屈じゃないんだよ。何で好きなのかっていうのは関係ない。自分でもよくわからないけど、一緒にいて楽しかったり安心したり不安な夜は甘えられたり。そういう自分のわがままを許してくれる存在だからこそ一緒にいたいし、好きだっと思える。恋なんてそれでいいんじゃないかな。少なくとも僕はそれでいいと思ってる。そう彼女に教えられたんだ」

君は僕の背中に隠れて僕の言葉に頷いていた。僕が立ち上がるとほぼ同時に晴樹も立ち上がり穏やかな表情でにっこり笑った。

「わかってくれたみたいだね。ありがとう」

僕が手を差し伸べて握手を交わした瞬間、晴樹は空いた左手でポケットから小型のナイフをすばやく取り出し僕の腕を切りつけていた。

「なぐんて仲良くするとでも思ったか。簡単に騙されるなんてばっかじゃないの？」

君は倒れこみ流血した僕の腕に僕のシャツの袖を破いたものを巻きつけ「大丈夫？」と声をかけた。君の鋭い眼光は彼に向けられていた。

「本当に晴樹の心は腐っちゃったんだね。本当は突然現れた瞬間心のどこかで期待してたんだ。あの頃私が好きだった晴樹が戻ってきたんだなって。もう恋人同士にはなれないけど、また昔みたいと一緒にバンドやって何でも話し合える友達に戻れるのかなって。けど私の勘違いだったみたいだね。がっかりしたよ。幻滅したよ、あなたには」

君に迷いの気持ちは感じられなかった。この言葉をすでに終わったことはいえ一度は好きになった相手に言うのがどれだけ辛いことなのか、僕にはひしひしと伝わってきた。一度ならず二度も同じ相手に裏切られたのだから。僕が人に対して今まで浅い付き合いしかしてこなかったのは怖かったからだった。信じることで誰かに裏切られることが怖かった。逃げちゃいけないってことを僕は君に教えられたけど、君には昔の僕のようになってほしくなかった。僕にできることは君を信じてあげること。それだけだった。

僕は痛みを振り払うように立ち上がり両手を広げた。

「そんなに刺したきゃ刺せよ。お前が壊したいって言うならそれでいい。どうせ何言ってもわからないだろうしね。だけどそんなことしたって無駄だよ。たとえこの場でナイフで刺されて二人が離れ離れになっても僕たちは心で繋がっている。誰にも切ることのできない糸でね。僕はコエのことを信じてるから、その信じる気持ちがある限り絆は決して消えない。だからお前の元に戻ってくるなんてことは絶対ない。それでもいいって言うなら刺せよ」

晴樹は狂ったように叫び声を上げてナイフを両手で持ってこちらに突っ込んできた。僕は向かってくる瞬間怖くなって目をつぶっていた。数秒の間だっただろうが、何か鈍い音がした。もう刺さって

いるのだろうか。痛みはない。ここは天国なのだろうか。いや、刺されて痛みも感じずに即死なんてあるとは思えない。僕は恐る恐るそっと目を開けた。

「……コエー！」

目の前には君の姿があつて腹部にはナイフが刺さっていた。君の皮膚からは大量の血が流れていて、口からも血を吹き出していた。晴樹は君の返り血を浴びて頭がいかれたように発狂している。

「……ごめんね。どうやらクリスマスパーティーの続きは無理みたい」

「何言つてんだよ」

必死に止血しながら僕はケータイを取り出し救急車に連絡する。君を抱きかかえながら。

「私のせいでとんだクリスマスになっちゃってごめんね」

「もういい、今救急車呼んだから。しゃべらないで」

君の声は少しずつ力を失っていくのがわかっていった。体も冷たくなつてきている。

「……ちゃんとブログ見てよね。私からユクエに手紙書いてるから」

「わかった。わかったから」

「大好きだよ……ユク……」

「コエ……コエー……！！」

君は気を失っていた。救急車が到着するころには危険な状態で緊急手術が行われた。その場にいた晴樹はまもなく警察に連行され、殺人未遂の容疑で逮捕された。僕は動揺を抑えながら何とか靖とさやかに連絡を取った。君の親は海外に住んでいるということと到着が遅れるそうだ。僕達は手術室の前のベンチに座り手術が終わるのを待っている。

「僕のせいだ。僕がちゃんとコエのことを守っていれば」

「そうやないやろ？もつとしっかりせなあかんで」

「でも僕は彼を煽った上に怖くて動けなかった。本当なら僕が刺されるべきだったんだ」

「そうじゃないでしょ。そんなこと聞いたら詩織も悲しむよ。今は詩織が回復することを信じるしかないんだよ」

「そうやな。大丈夫、コエちゃんは強いんやから。それは悟、お前が一番わかってんのやろ？」

僕は答えることができなかった。本当に僕は君の事をほかの誰よりもわかってるんだろうか。全部わかった気であるんじゃないのか。自信がなかった。動揺して僕は自分自身が信じられなくなっていたのだ。

十時間以上にも及ぶ大手術の末に先生が出てきたときにはもうすっかり朝日を覗かせていて正午も近くなってきたときだった。僕は先生に問い詰めた。

「先生、それでコエの、春川さんの容態はどうなんですか？手術は成功したんですよね」

「はい、手術は成功しました。幸い傷も浅く出血も君が止血をうまくやってくれたおかげで最小限にとどまっています。命に別状はな

いでしょう」

「それじゃあコエは無事なんですね？」

「はい、ですが……精神的なショック状態のためか意識が戻りません。いつ意識が戻るかもわからない。明日戻るかもしれないし、数年先、数十年先、もしかしたら一生このまま植物状態かもしれない」

「そんな……」

僕は淡々と先生にそう告げられると、ショックを隠しきれなかった。君のあの笑顔がもう見られないかもしれない。そう思うと僕はなんて無力なんだろうと心の中に空洞ができたように虚しさを覚えていた。もう何がなんだかわからない。今までずっと一緒だった君は今僕の前にはいない。君がこんな形で僕の手から離れていってしまうなんてどうしても思えなかった。

病室に移された君の顔はとても綺麗だった。まるでただ眠っているだけなんじゃないかってくらい。ただ長い睡眠に入っただけで僕らを騙しているんじゃないかってくらい君の寝顔はまだ生きていることを実感できる姿だった。

「ほんまにすやすや眠ってんねんな。落書きしたくなってきてしもうたわ」

「ほんと。こんなに心配してる私たちが馬鹿みたいだね」

靖とさやかは君の顔に手を当て涙を零していた。僕の頭にはあの日君が僕に話してくれた一言一言がよぎっていた。君のバイトしているお店に行ったこと、競馬を観戦したこと、君の手料理を食べたこと、君との会話の数々……。ひとつひとつを思い出すように辿っていくうち、僕は君の最後の言葉を思い出した。

「……ブログ……」

「どうしたんや、ブログって？」

僕はぼそつと呟いて病室を出て病院の外に走り出した。君が最後に言っていたことに意味があるような気がしてならなかったからだ。病院から出ると僕はケータイの電源を入れて君のブログにアクセスする。君は僕にだけのメッセージを書くとき決まって管理人にしか

見られない非公開で記事をアップしていた。僕と君しか知らないパスワード。それがないと管理人ページは見られないのだ。僕はすばやくIDとパスワードを打ち、君のブログにログインした。『すべての記事を見る』をクリックすると予想通り最新記事に非公開の僕に当てた手紙が書かれていた。

『ユクエへ コエからのメッセージ

今日は初めて一緒に過ごすクリスマスイブだね。

ユクエと出会うつもりすぐ1年が経とうとしているんだね。

なんかあつという間だった。

本当にユクエと過ごせた毎日は楽しかったよ。

ユクエは私にたくさん感情をくれた。

私が苦しんだとき、いつも傍にいてくれた。

見るたびに遅しくなっていて最初は私を支えてあげなきゃと思っ
てたんだけど、いつの間にか逆転していたよね。

あの時のライブで出会うって思い切ってメール送って本当によかった
と思ってるよ。

この出会いはきつと運命だったんだよね。

もし私がどこか遠くに行っていなくなつたとしてもきつとユクエな
ら私を探し出してくれると信じてるよ。

そのときはあの場所にもう一度来てね。

二人つきりで行きたいと約束したあの場所で私はずっと待っている
よ。

約束だよ。

直接言うのは恥ずかしいから、ここで言うね。

今まで本当にありがとう。

これからもよろしくお願いします。』

目の前には広大な海が広がっていた。真冬の海の風は肌に触れるこ
とで刺さるような痛みを感じる。僕は閉鎖された海岸をくぐって砂

浜へと足を運ぶ。そこには誰もいない。そんなことはわかっていた。けどどこかに君だけは待っていてくれている。そんな気がした。だから僕は痛みを思い出した足と戦いながら少しずつ奥へと入っていく。あの夏に見た君に会える気がしてそれは苦痛というよりは希望だったのだ。

ここまでずつと歩いてきて痛みだした足が悲鳴を上げて僕はその場に倒れこんだ。砂浜に背を向けて目をつぶって寝そべっていると、君の笑顔が頭に浮かんで消えることはなかった。あのときの笑顔をもう一度みたい。そう願ったときどこからともなく聞き覚えのある歌声が聞こえてきた。僕の大好きな柔らかく優しい天使のような歌声。

「……コエ？」

僕は目を開けて立ち上がる。足の痛みをこらえて必死に微かに聞こえる声の方向に進んでいく。そこにはピンクのティディベアのストラップのついたケータイとサンタクロースを模した服が落ちていた。僕は君の名前を必死に叫ぶ。

「コエ！」

そこには僕のプレゼントした銀の三日月のネックレスのみを身につけた裸の君が立っていた。真冬に北風の吹くその場所で震えることも知らず、まっすぐ寂しそうな背中を僕に見せている。後ろ向きの君は僕に気付いてにっこり笑い、言葉を投げかける。

「ありがとう。ここに來るってわかってたんだね」

「当たり前じゃないか。僕は君を絶対に離さない。これからずっとと一緒にいるって、そう約束したる？」

君は潮が満ちている海に向かって飛び込んだ。僕はその場で服を脱ぎ捨て君を追いかける。君を海の中で見つけると君は下から覗き込みながら海面に顔を出して微笑みかけた。

「大好きだよ。優しいユクエも頼りないユクエも演じてるユクエもライブで騒いでるユクエも全部」

「僕もコエのことがほかの何よりも好きだ。強いところも弱いところ

るもみんな」

「だけど一番好きなのはこうしてずっと傍にいてくれるユクエなんだ。ねえ、これからもずっと私の傍にいてくれる？」

辺りには雪がちらついていた。僕は君の体を引き寄せて強く抱いて言う。

「当たり前だろ。僕はもう離れたくない。これからもずっと永遠に傍にしよう」

僕は君と誓いのキスを交わし、海の中で君と抱き合っていた。お互いがお互いを離さず想いを求め確かめ合うように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2964i/>

詩なき言葉は届かない

2010年10月10日01時49分発行